281
MA26
(7)

始

コ-3743
お
~~324.119~~
281
M26

前田蓮山著

三黨首領

東京 文化出版社刊行

大正
10 10.12
内交

本書を原、加藤、犬養三氏に呈す。

御姓名の順序は政黨の大小に準じたのですから、御諒承を願ひます。

大正十年十月五日

前田蓮山

原政友會總裁

加藤憲政會總裁

犬養國民黨總理

三黨首領

前田蓮山著

（原敬氏、加藤高明氏、犬養毅氏）

一

原氏は直覺的洞察力に富んで居る。加藤子は演繹的推論に長じて居る。そして犬養氏は強い衝動性を有して居る。是はそれ〴〵彼等の特色と言つても可からう。從つて是が又彼等の人格全體の傾向を作つて居るやうに思はれる。

原氏は『五分間以上議論を繼續する者は愚者だ』と言ふさうである。それ程彼の頭腦は明晰犀利であるが、彼が機に臨み變に應じて、判斷を下し計畫を立

つることの電光石火的であるのは、智慧以外に、別に天來の直覺的洞察力とでも云ふべきものがあつて然るにはあらざるかと思はしめるのである。蓋し人格の或者は煩瑣なる推理を用ひないで、直ちに事物の眞相を看破する一種の力を有することがある。そして此能力は鋭利なる智性の緊張裡に現はるゝ者もあり、或は熱烈なる情性の緊張裡に現はるゝ者もあるが、大發明家、大事業家、大政治家、大軍略家などは前者の人格に屬する者が多く、大理想家、大宗教家、大藝術家などは後者の人格に屬する者が多い。而して原氏は前者の傾向を有し、犬養氏は後者の傾向を有するやうである。

直覺的洞察力に富んで居る原氏は、自然學問上の原理原則に重きを置かず、直ちに事實の上に立つて一己獨自の進むべき道を發見しやうとする。從つて彼の明晰犀利なる頭腦は、常に歸納的に働く傾向を有して居るのである。加藤子も亦原氏に劣らざる鋭敏の頭腦を有して居るが、その思索の傾向は原氏に反し、

學問上の原理原則に最高の權威を認め、之を前提としたる演繹論理の形式を踏んで進まうとするやうだ。原氏を歸納的人物と稱することを得るならば、加藤子は演繹的人物である。即ち原氏の態度は實際的、創作的で、加藤子の態度は抽象的、批評的に傾く。

演繹的人物は明白透徹、正々堂々として、高尚の外觀を呈するけれども、內面に生命の躍如たるものがなく、實行力に乏しい。惡評すれば一個無價値なる論理的遊戯に墮することがある。歸納的人物は事實の間に彷徨して、部分に囚はるゝ弊があるので、一見凡俗なるが如く、低調なるが如く、數々然として外觀甚だ振はないやうではあるが、新生命は常に內に躍り、乾坤一擲の大事業を敢行し得る者は彼等である。ヤッ付ケ得る者は彼等である。何となれば一個の原則から演繹して結論を得ることは、冷靜にして透徹なる頭腦を有つて居れば机上で出來るけれども、原則を創造しやうとならば、直接宇宙の大秘密裏に飛

び込んで、探し廻はるの大勇氣と大熱誠と、そして犀利なる直覺的洞察力とを有たねば出來ないことだ。引力說から演繹して落體の速度を知るのは銳敏なる頭腦を有する者の出來ることであるが、リンゴの落つるを見て地球の引力を見出し、新に引力說を確立したるが如きは、犀利なる直覺的洞察力と大なる勇氣と熱誠とを有して居る天才でなければ出來ぬ。故に『天才は冒險家である』と言つた者さへある。

原氏と加藤子との傾向を、右のやうに考へて見れば頗る興味がある。加藤子の演說――憲政會大會などでやる所の――は博言宏辭、論理整然、詳說細論、威風堂々とも言ふべき觀があるけれども、それは觀兵式的の威風であつて、敵黨を討つの力に乏しく、人を動かす熱が足らぬやうに感ずる。而して彼が左顧右眄、普選問題に對して理屈の立て方を考へつゝある間に、原氏は乾坤一擲、議會を解散して、現實に新生面を打開した。

二

原氏は直覺的洞察力に富み、歸納的思索の傾向を有し、常に現實の上に立脚しやうとする。彼は百年の大計は今日の事實を最も善く處分することにありて存すると考へて居るであらう。キリストが『汝等明日の事を思ひ煩ふ勿れ、今日は今日の事を思ひ煩へ、一日の苦勞は一日にて足れり』と言ひ、禪僧が當意即妙の修養をなす如き、彼の信念――信念と言ひ得ないならば彼の態度に近いものがある。

彼は超然主義とか政黨主義とかと世間が騷いで居る間に、默々として實力の蓄積に努めた。黨勢擴張に全力を傾けた。世間からは主義なく主張なき機會主義者と罵られ、官僚の走狗、憲政の賊など云ふ惡評を浴びたけれども、彼は之を馬耳東風と聞き流し、桂公と妥協し、山本伯と提携し、寺內伯と協調した。

是れ言ふまでもなく、彼が今日の事實に重きを置いた結果である。彼は事實に於て當時日本の政權が必ずしも多數黨の手に落つるものでないことを知つて居た。彼は當時政治の中心が多數黨と長閥若くは薩閥の或一方との交叉點に存する事實を見た。

如何さま、維新以來五十年、前半期に於ては薩長の二大勢力相對峙し、土肥其間に介在して巧みに兩勢力と離合しつゝ政權は移動したものである。後藤象二郎、大隈重信兩氏の如きは、斯くして地位を贏ち得た人であると見らるべき理由がある。後半期に至り、自由、改進の二政黨は土肥に代つて立ち、薩と長とは各々彼等の一方と結んで爭つた。改進黨の大隈侯が黑田内閣に入れば自由黨の板垣伯は山縣公を援け、板垣伯が伊藤内閣に入れば、大隈侯は松方内閣に入つた。

長閥が自由黨に接近したのは、進歩黨が薩閥と結んで所謂松隈内閣を組織した

た結果であつて、山縣公が大隈侯を援助して内閣を組織せしめたのは、政友會が薩閥と結んで山本内閣を組織した結果であると見ることが出來る。實に薩長兩閥と自由進歩兩黨と錯綜纏綿しつゝ均衡を保持して來たのである。若し政友會にして桂公を捨てんか、國民黨の一部即ち改革派なるものは直ちに之を拾はうと待ち構へて居た。假令政友會が妥協しなくとも、必ずや他の一方の政黨によつて妥協は行はれたに違ひない。

果して然らば妥協なるものは當時の大勢であつた。必然であつた。彼は此事實の上に立脚したのである。伊藤公の政友會を組織するや、間もなくして桂内閣と戰ひ、解散まで受けたものであつたが、重ねて解散に會ひさうになつたら——尤も政府の誘惑もあつたが、政友會は大動搖を起し、遂に伊藤公は政府と妥協した。後に公が樞府に逃げ込んだのは、長閥との間に纏綿した種々の事情にも因るけれども、政黨者流の頼み甲斐なきに愛想を盡かしたことが、其一原

因になつて居ると推察すべき材料がある。原氏は曾て當時を私に語つて『實に何うにも斯うにもお話にならぬ始末だつたからね』と苦笑した。伊藤公と桂公と妥協の内約が成立したことを聞き出した黨員の多くは、公は吾々黨員を賣つたと言つて憤つたが、中には眞に憤つた者もあつたらうけれども、寧ろ蔭辨慶が多かつたらしい。當時伊藤公は代議士會に於て妥協の理由を説明し『諸君の中には勇氣勃々たる人多ければ、再三の解散にも頓着せざるべきも、我輩は苟くも諸君の信任によつて總裁たる以上、諸君をして斯る不幸に陷らしむるを見るに忍びず』と言つたものだ。是れ實に黨員に對する深刻なる皮肉ではないか。そして松田正久男も亦黨員に辯解する所があつたが『總裁は諸君のため救世主である』と言つたやうな口吻であつた。

原氏は其頃から黨員を率ゐて官僚と戰ふことの困難を知つた。是に於てか彼は伊藤公と共に政黨から逃げ出す代りに妥協の方針を採つたのである。

三

原氏の妥協政治は、傍觀者から見れば、誠意も勇氣もない、一時の胡麻化しのやうであるけれども、彼自身に取りては徹頭徹尾眞劍であつた。全力を傾倒した大仕事であつた。

横井小楠は『自分が今日行つた事に就て、明日批評せらるゝは迷惑である。今日の事は今日之を批評して貰ひたい。自分は今日は今日の最善を盡し、明日は明日の最善を盡す』と言つたさうであるが、是れ其まゝ取つて原氏の言はうとする所であらう。彼は今日には今日の意義があり、明日には明日の意義があると信じて居る。彼は前祝ひもせず、取越苦勞もせず、後悔の愚痴も言はぬ。一刻一刻その最善を盡すからである。そして彼には人事を盡して天命を待つ一種の悟があるからである。

併しながら、部分があつて全體は存し、全體があつて部分は存する。今日があつて永久は存し、永久があつて今日は存する。根抵に一の理想があつてこそ初めて今日の最善と明日の最善との間に聯絡があり、今日の事を明日改むるに意義があるのである。小楠やキリストの眞意も亦茲にあつたに違ひない。禪は當意即妙を修養すれども、一大精神、一大理想が其底に流れて居なければ、なか〳〵以て當意即妙とは參らぬ。當意即妙なるものは充實せる生活力が理想を透して發現する狀態であらうと思ふ。原氏の現實主義――斯う言ひ得るならば――理想を通したものであるか何うか。

原氏は眼前の形勢を洞察して妥協政治を行つた。私は嘗て此事に關して彼に質問したことがあるが、彼は『妥協は一度でも此方から求めた事實はない。先方から申し込んで來た時に、此方は自分の政策の根本組織を破壞しない範圍で讓歩したのだ。決して苟合はしなかつたのである』と答へた。如何にも私の聞く所に誤りがないならば、桂、西園寺妥協時代に於て、最も手强く官僚と抗爭したのは彼であつた。世間では松田男は有志家氣質で、政黨の本領面目を維持することに努むるけれども、原氏こそは官僚氣質で妥協苟合の本家であると見て居たが、事實は全然之に反對であつた。松田男は天性調和の德を有し、寧ろ桂公と原氏との談判を仲裁する役廻はりであつたにも拘はらず、血氣にはやる黨員等が妥協を不可として其不平を訴へて來れば、夫れも然うだと相槍を打つて黨員を喜ばせたものである。然るに原氏は談判の際は强硬であるが、一旦妥協が成立すると、今度は踵を轉じて黨員に向ひ、不平者を壓へること桂公に對する如く强硬であつた。彼は內に對しても外に向つても憎まれ役に當つたのである。

斯くして彼は一歩一歩、海潮の汀に滿つるが如く、閥族の脚下を洗つて彼等に迫つた。そして今や殆んど彼等の根抵を崩壞し、彼等が好むにせよ好まざる

にせよ、事實に於て政黨内閣を認容するの外退つ引きならぬ形勢にまで彼等を押し詰めた。犬養氏が數十年唱道し來つた理想と彼が默々として行ひ來つた結果とは、殆んど同一點上に近付かうとして居る。是れ決して彼が意外とする所ではない。偶然とする所ではない。曩に中橋文相問題が貴族院で紛糾した時、政友會の幹部中には、貴族院と妥協して文相を辭職させるのが、政權維持の上策だと論ずる者もあつたが、彼は謎ては立憲政治は出來ませぬと言ひ、若し貴族院が文相を辭職させたいなら、正々堂々責任を取つて議場で彼を彈劾せよと逆襲の態度を示した。彼は内閣組織の初めから『隱謀では倒れぬ』と傲語して居る。彼はモウ好い頃合と見て愈々本音を吐くのである。彼は憲政に對して理想を持つて居なかつたのではない。

犬養氏はその深刻雄大な辯舌を以て憲政の理想を宣傳したが、原氏はその明晰透徹の頭腦と鋭き直覺的洞察力とを以て憲政の理想を實現すべき力を養つた

前者が天に飛び付かうとして幾轉倒しつゝある間に、後者は斜面を歩んで悠々と天に昇つた——昇つたと言ひ得なければ近付いた。實に斜面を利用すれば幾萬噸の軍艦でも海上から富士山の絶頂に引き上げることが出來るのである。

四

加藤子は學問上の原理原則に最高の權威を認め、演繹論理の形式を踏んで、飽くまでも合理的生活を遂げやうとする。故に彼は天命を信ずることが出來ない。人間の能力、自分の聰明を尊しとして、神の支配を認めない。イヤ是れは餘りに言ひ過ぎであらうが、要するに彼は運を天に任かすと云つたやうな行爲を敢行すべく餘りに人間的理論——斯う言ひ得るならば——を重視するのである。彼は合理的に滿足なる結果を豫期しなければ容易に手を下さない。

原氏は人間的理論——演繹論的——に執着せず、理論の外に一二分の天命を

認める。彼が現實に立脚し、今日の最善を盡すに方つては、用意周到、水も漏らすまいとするけれども、それても凡そ人間の智慧の到り得る限度に就て諦めを有つて居る。彼は八九分まで自己の智慧で見込みが付けば、殘り一二分は之を天の意に任かせて遣つ付けやうとする。故に彼は今日の最善を盡しつゝ、安んじて明日の至るを待ち得るのであるが、加藤子は明日に對する豫想が付かなければ、今日の事に着手し得ないと云ふ風がある。

第一次西園寺内閣の時、原氏は内務大臣として、加藤子は外務大臣として、共に内閣に席を連ねたが、加藤子が例の鐵道國有案に反對するや、原氏は一日西園寺首相の命を含んで加藤子を訪ひ、その意見を飜さしむべく、説伏勸誘大に努めたが、加藤子が頑として之に應ぜぬので、遂に原氏は『兎も角やつて見やうぢやないか。やつて見て惡るければ廢すまでの話さ』と言つた。加藤子は之を聞いて『そこが君と僕との異なる點だ』と答へたと云ふ話であるが、如何

さま、そこが原氏と加藤子との異なる點である。原氏に言はせると、加藤子の非と言ひ自分の是と言ふ所は、是れ單に議論に過ぎない。眞の結果はやつて見なければ判からぬのである。と斯う原氏は言ふであらう。彼は最初から議論を有たぬのではない。考ふべきだけは考へた末に、それ以上は天に任かせて『兎も角やつて見やうぢやないか』と出たのだ。彼は小事に對しては斯やうな態度には出ないが、大事に對してウンプランプの果斷をやることがある。所が加藤子は何事も結果に對して成功と云ふ合理的の説明が出來なければ手を下さぬ。故に彼が態度は直截簡明であるが、原氏は容易に將來を語らぬ、これは——彼が自ら意識するにせよ意識しないにせよ——彼の心の奥に、彼自身説明することの出來ない天命を信ずる所があるからであらうと思ふ。彼は來年のことを言へば鬼から笑はれることを恥ぢて居る。

私は曾て原氏に向ひ、彼が政黨に入つた理由動機に就て問ふたことがあつた

が、彼は微笑しながら『吾輩は當時大阪に居たが、伊藤公から今度政黨を作つたから來ないかと云ふ書面だつたから、可からうと云ふので直ぐに上京した』と答へた。私は又加藤子からも直接その政治上の經歴に就て聞いたことがあるが、彼はその出所進退に關して、一々條理の立つた説明を附した。これは彼から聞いたのではないが、彼が桂公に勸められて同志會に入つた時には、金を出すことは御免を蒙る事、無理な政爭をやらぬ事と云ふ二條件を附けたと云ふことであつた。

原氏と伊藤公との關係と、加藤子と桂公との關係とは、無論同日の論でないのみならず、加藤子として右のやうな條件を出さなければならぬ事情もあつたであらうと察するし、又原氏とても、私に説明しないだけのことで、色々の意見もあり、事情もあつたであらう。併し大體の傾向は、原氏は『可からうと云つて入黨した』流で、加藤子は條件附き的である。若し原氏が加藤子の立場にあつたならば、彼は條件を附ける代りに、先づ桂公其人を觀察し、事を共にするに足る人と信ずれば、無條件にて握手したであらう。そして是にも矢張り一二分の天命觀を含むのである。何うせ乘りかゝた船だ、風吹かば吹け波立たば立て、一蓮託生で押し出さうと云ふ風な態度がある。

五

如何に智慧者だと言つた所で、又如何に直覺的洞察力に富んで居ると言つた所で、人間の力は高が知れて居る。八九分まで人間の智慧や直覺で見込みが付けば、殘り一二分は運を天に任かせて遣つ付けると云ふ信念と勇氣がなければ大きい仕事は出來ぬ。古來大政治家、大事業家等の遣り方は大概斯んな風であつた。實に天命を信じ得る者ほど、大きな事業を敢行することが出來る。即ち彼等は人間の智慧と直覺力に天命を加へた延長線を直徑として圓形を描くので

あるから、その圓形は人間の智慧と直覺力とのみを直徑としたる圓形よりも大きいわけである。斯う云ふ見方から原氏と加藤子とを比較すれば頗る興味があるではないか。

天命を信じ得る者は人をも信じて之を包容する度胸を有つて居るが、天命を信じ得ない者は容易に人をも信じ得ない。彼等は人を信じないで其人の有する合理性を信ずる。理を以て合ひ理を以て離れるのである。原氏は容易に人を信じないが、八九分まで信ずれば、その殘りは神の領分として、その人に事を託して疑はぬこと、恰かも仕事を遣つ付ける場合と同樣の態度がある。處が加藤子は合理的側面、或は一藝一能の部分を信じ、それ以上に踏み込み得ない。踏み込み得ないと云ふのが言ひ過ぎならば、少くとも然う!た傾向を有つて居る。

天命を信じ、人を信じ得ることは、或意味に於て冒險であり、勇氣であり、同情であり、謙讓である。原氏も加藤子も共に自信力が強く、押しが強く、剛

愎であるが、原氏は前に度々述べた通りで、最後に天命を信ずるだけの謙讓はある。併し加藤子は飽くまでも自己の合理を尊しとなし、彼自ら『人が馬鹿に見えて困る』と言ふ位で、謙讓と同情に於ては聊か乏しい嫌ひがありはせぬか。而して彼は飽くまでも合理的であるから、冒險をやらぬのは言ふまでもないが、勇氣に乏しいとは思はれぬ。抑も勇氣とは生活力が人格內容の全部、即ち全意識に漲ぎれる狀態であらうと思ふが、彼が演繹的頭腦は自然彼の人格の內容を單調ならしめ、生活力は主として智性にコビリ付き、意識の活動が單調に陷る結果として、勇氣は變じて偏屈とか傲慢とか云ふ形を取つて現はるゝのである。

筆が思はず先走りして仕舞つた。私がモ少し玆で言はうとして居ることは、原氏が人を信じ得るに反し、加藤子が人（personality）を信じ得ないで唯だその合理性を信ずると云ふ點——多少の言ひ過ぎがあることは前にことわつて置いた

――に關してゐある。

立憲政治は合理的の政治、直截簡明の政治であらねばならぬとすれば、加藤子の態度こそは立憲的で、原氏の白紙的、對人的の態度――其れは原氏が常に執る態度ではない、時として然う云ふ態度に出ることがある――は非立憲的とも見られ得る。所が一方から觀察すれば政治は人間の上に行はれるものである。政治は政治家が自己を國民の上に描ぐ創作であると私は信ずる。實に政治は議論でもなく說明でもない、一種の創作である。區々たる學問上の原理原則若くは習慣約束を金科玉條として、その前提の上に論理の形式を辿るやうなことは、政治家の仕事でなく、屬僚の事務に過ぎないのである。政界の惰氣を破り、人心の沈滯を振起せしむるやうな高等政治は、區々の議論に拘泥せざる乾坤一擲的の快擧に出なければ駄目だ。

立憲政治は合理的であらねばならず、政黨は理を以て合ひ理を以て離れねば

ならぬと言ふのは、一應尤もであるが、バヂョットはその英國憲法論に於て、英國の憲政は英國人に英雄崇拜の念があるから圓滿に運用されたと說いて居る。英獨開戰の當時、英國は白耳義の中立を保護するために開戰すると宣言したが、カイゼルは『白耳義の中立は一片の紙ではないか。英國は此一片の紙を守護するために、人命を賭して開戰するのか』と皮肉を言つた。曾てピューローは海軍擴張案を提出するに方り議會に演說して『世界の版圖は確定せられたと言つてはならぬ。英國は人間の住まない多くの廣い領土を有し、獨逸は健全にして聰明なる國民――人類の文化に貢獻することの多い國民――を容るゝの土地がないので苦しんで居る。世界の版圖が確定せられたと言はれては甚だ迷惑である』と云ふ意味を述べた。英國はカイゼルの所謂一片の紙――英國に言はすれば正義――を理由として戰を宣し、獨逸は自ら生きんがために戰はねばならぬとした。併し英國とても實は單に白耳義の中立のために戰かつたのではあるまい。

若し獨逸が白耳義の中立を侵さないで、佛國に大打擊を與へ得たならば、英國はそれを傍觀して居ることが出來たであらうか。所詮英國は他の必要に迫まられて戰つたのだ。加藤子の缺點は動もすれば理論の末に囚はれて第一義的態度を失ふことではあるまいか。

六

演繹論は前提の立てやう如何で、同一の事實の上に數個の合理的結論を作り得る。甚だしきは正反對の二つの結論が各合理的であることさへ、場合によつてはあり得るのである。現今の政治家中、その最も著るしき例は尾崎行雄氏の行動中に發見される。彼は曾て政友會院內總務であつた時、院內總務としては斯々、總務委員の一人としては斯々、政黨員としては斯々、一個人としては斯々と、一身の行動の上に同時に四つの結論を作つたことがある。是れ尾崎の一身

四樣使ひ分けと言つて有名な話だ。併し彼は實際に一身を四樣に使ひ分けたのではない。單に前提を四つ立てゝ四つの演繹的結論を得たと云ふに過ぎないのである。彼が實際の行動はその四つの內の或一つを選ばなければならぬのであつた。彼は自己の一擧一動に對し、必ず理屈を附けて辯解しなければすまぬ人で、彼の出所進退は何時でも彼に依つて合理的に說明されるけれども、彼の過去を通じて眺むれば其間に隨分矛盾撞着がある。例へば彼は久しく二大政黨對立論者であつたが、絕對多數の政友會に復歸した頃は一院一黨主義と云ふものを唱へた。所が政友會を脫して政友倶樂部を組織した時には、ケアスチング、ヴォートなど稱して第三黨の必要を說き、更に中正會となれば、政黨に黨員名簿があるのは不可ない、問題每に離合集散勝手次第でなければならぬと主張したかと思ふと、大隈內閣時代には、小異を捨てゝ大同に就くを可とし、同志、國民、中正の三派合同して、政友會と二大政黨對立の形式を作らねばならぬと

唱へ、犬養氏の態度に對して、憲政の賊でゞもあるかのやうな口吻であつた。

尾崎氏は理想家らしい外觀を有して居るが、實は眞の理想家でなく理屈屋であるから斯うした行動が出來るのである。理想は『斯々あらねばならぬ』『斯々あらしめたい』と云ふ全體的窮極の精神的世界であつて、理想家はその精神的世界を實現すべく現實世界と戰ふのであるが、理屈屋――斯く言ひ得るならば――は現狀を三段論法的に說明し、或は自己の好める又は偶然の一個の前提を持ち出して演繹的結論を作り、その結論に從つて自己の行動の方針を客觀的に立てるのである。

佛人ボーミーの『英國々民』と題する書に『英國人の思想の定め方には一種特別の傾向がある。英國人はその政治上の說を擇ぶに際し、利害輕重を比較することが充分でないやうに思はれる。彼等は先づ偶然一說を擇び、その思想を中心として說を固め、更に之に理由を附して固守するやうだ』と言つて居る。

此說が果して肯綮に當つて居るか何うか私の論じやうとする問題ではない。唯だ右の如き傾向を有する者は理想家でなくて理屈屋であると云ふ一例として擧げたのである。尤も偶然にもせよ一度び擇んだ一說を『固守する』と云ふことは正直と言はれるかも知れんが、尾崎氏の如きは固守することさへ珍らしい位である。加藤子は正義の念に强く、正直な人であるから、宙返り的の變說をしない。併し所詮彼は理想家ではなく理論家であるから、動もすれば理論に引きずられて現實に行き詰まることがある。例へば大隈內閣の時、彼が大浦事件で辭職したのは論理整然たる立派な行動であつたけれども、彼は現實と衝突して、此論理を押し通すことが出來ず、結局大隈內閣を援助した。普通選擧問題に對しても、幾度か說を變じ態度を改めた。是れ畢竟彼が理想家でもなく實際家でもなく、理論家――惡く言へば單なる理屈屋であるからだ。大隈內閣時代の對支外交でも稍々理屈屋的弱點を示して居る。併し彼は今日まで甚だしく理屈屋

的弱點を曝露したと云ふことは少い。是れ前に述べた通り、彼が正義の念に強く正直な人であるからである。

原氏は機會主義者など云ふ評を受けて居るが、彼は『朝に在ると野に在るとによつて主張を二三にせぬ』と云ふのが自慢である。實際に自慢し得られるものであるか何うか、私は除外例なしに之を承認することは出來ないが、兎も角、現實に立脚し、今日の最善を盡さうとする彼に取つては、宙返り的機會主義は實行されぬ筈である。何故なれば、自然(現實)には殆んど偶然と云ふものはないと言つても可からう。今日の二葉が明日忽然として老木となる氣使ひもなく。桑田の變じて海となるにも自ら順序があるものだ。機會主義は却つて理屈屋に多い。理屈は如何樣にも立つからである。彼は議場の討論に於て縱横無盡に切り廻はるが——詭辯强辯も多い——之は彼の餘技、寧ろ惡戲である。彼に『巧くやりさすね』とお世辭を言ふと、相手が相手だから止むを得ないと、サモをかしさうに笑ふ。

七

人格は本能、遺傳、經驗、修養、學問等に依つて作らる。今度は原氏と加藤子の經歷を一見しやう(犬養氏は暫く後まわしにする)

原氏の祖先は近江淺井氏の一族であつたが、淺井氏滅亡後奥州に行つて南部氏に仕へ、彼の祖父は南部二十萬石の家老職に任じて功蹟を擧げたので、藩主と同樣の紋を用ふることを許されたと云ふ南部藩での名家である。歷代の總理大臣中、舊幕時代の家柄としては、彼は西園寺公の次に位するのだ。

加藤子は名古屋の服部氏に生れた。私は服部氏が何んな家柄であるか詳しいことを知らんが、世間に知られて居らぬ位であるから、格別の家柄でもないらしい。彼の父は晩年巡査をして居たと云ふ話もある。加藤氏は彼の養家だ。

舊幕時代の南部人はその土地の名產鮭と共に鼻曲りと呼ばれ、剛愎にして苟くも人に許さぬと云ふので評判だつた。名古屋の名物は金の鯱、その金の感化を受たか何うかは知らぬが、名古屋人は勘定高いと云ふ評判である。南部と名古屋、原氏と加藤子、ちよつと面白い對照ではないか。

原氏は生れてから今日まで綿服を着たことがないと言つて居る位で、少年の頃には家來を召伴れて漢學の塾に通つたもの、彼は九歲の時に二人の兄弟と五人の姉妹と共に父を失ひ母の苦心に同情すればにや、彼の親孝行と兄弟姉妹思ひとは鄕黨の手本とせられ、彼の聰明は藩中を驚かした。彼は多くの立志傳に於て、少年時代を賑はす惡戲の逸話を持たない。彼はその愛くるしき眼、豐かな頰、漆黑の髮（彼の髮は四十位から急に純白になつた）白哲の顏、唯だ常人に優れた身長さへなければ、女子にして見たいやうな美少年であつたが、その堅く結べる唇の內には、鐵の如き意志と、さかぬ氣とを包み、早くも老成人の風

があつたと傳へられて居る。

彼の母は丈夫の素質を有し、武士的訓練を受けた賢女であつた。彼女は秩序と規律とを旨とし、堅實にして淡泊な生活を喜んだ。彼女の大嫌ひは輕薄と虛榮に滿ちた都會生活で、出世した敬氏の家には住まず、鄕里の恭氏（敬氏の兄）と共に、舊幕時代に於ける原家としての身分相當の生活を營みつゝ、手づから蕎麥を打つて隣人故舊に振舞ひなどして樂しんだ。そして人が何故東京に住まぬかと問へば、親は長男の家に居るのが至當、長男の身分相當に暮らすのが當然だと答へたものであるさうな。鄕人間の冠婚葬祭などで、彼女を上座に招ずれば、彼女は何故に自分を斯樣に優待するだらうと言つて、衷心から不思議に思ふらしく、敬大臣の母堂であると云ふ考へが毛頭ないやうに見えた。少くとも彼女は舊幕時代に於ける原家の格式以上に出てず、恭氏の母であると云ふ態度を失ふまいと努めた。彼女は九十餘の高齡で先年亡くなつたが、その葬儀は舊

幕時代の原家の格式に從ひ、敬氏は原家の二男として會葬したものである。

斯うした堅實な彼女は、一面至つて樂天家であつた。八名の子女を抱へて良人に先立たれた彼女は、人事を盡して天命を待つてふ信念を固め、不幸に遭つて却つて樂天家となつた。子女の敎養に一身を委ねて尙ほ餘力あれば貧民を賑はすを樂しみとし、又謠曲を歌ひ舞を舞ひ、時に藝妓を招いて歌舞せしめなどして喜んだ。その亡くなる前、九十餘の高齡で病床に横はりながら、今度快くなつたら盛岡中の藝妓を總上げして遊ばうと豪語したさうである。兎に角、彼女は尋常一樣の女ではなかつた。

原氏の人格の根抵は斯う云ふ母に依つて作られたのである。彼が私生活の淡泊、無造作なことは多くの人の知つて居る通りで、彼は農商務大臣秘書官時代に、千圓許りて買ひ入れた狹い家に、總理大臣となつた今日まで、何の不自由な顏もしないで住んで來た。淺子夫人が『此家では良人の死んだ時、葬式に困

るから、モ少し廣い家を建てたい』と言つて、葬式を標準とした間取りなどの設計を立てると、彼はウン〳〵と聞いて好い氣になつて居ると云ふ有樣である。斯やうな彼の生活は質朴と云ふよりは淡泊と云ふ方が當つて居る。

彼は四十歲位まで隨分大酒であつたが、そのために朝鮮公使時代に二度も卒倒したので、それからブツツリと酒を止めた。彼が止たとなれば本當に止めたのである。煙草は少し用ふるが、何うても可いらしい。書畫骨董も見れば多少の趣味を感ずるだらうが、態々買ひ求めやうとはしない。食物の好き嫌ひを言はず、膳に出る物を片つ端から平げる。寒いと言つて火鉢に手を差出すことなく、暑いからとてバタ〳〵と扇を使ふのでもない。幾時間でもキチンと膝を折つて、內でも外でも決して胡坐などをかくと云ふことはないと云ふ。それで藝妓などを相手に遊ぶことなどはなか〳〵上手で、皮肉も言はず、からかひもせず、平々凡々の話し振りであるが、それで相手を飽きさせないもうだ。實に奇

妙な男だと三浦觀樹子も話して居た。彼の家の雇人なども『うちの主人位手のからぬ人はあるまい』と言つて居る。身のまわりは凡て自ら始末し、風呂に入れば必ず元通り蓋をして上つて來る。新聞を讀めば必ず元通りに折つて重ねて置くさうである。此等の事、全く彼の母から受けた感化らしい。人事を盡して天命を待つ樂天的の態度なども、よくその母に似て居る。

八

加藤子は幼少の頃他家の養子となり、養家の資金(?)で東京に遊學し、東京英語學校から東京大學に進み、明治十四年に首席で卒業した。廿二三の頃だ。

原氏は明治初年十四歳で上京して豫備教育を受けた上、司法省法學校（同校は專ら佛蘭西法學を講じた）に入つたが、偶々例の賄征伐事件が起つて、中途で退學して仕舞つた。老成人の風ある彼は――絹布の衣服に仙臺平の袴を折目

正しく着けて居ると云ふ風で――賄征伐のやうな惡戯に加はらう筈はなかつたが、彼は事件の紛糾するを憂へ、學生側と學校側との間に立つて調停の勞を取つた甲斐もなく、陸實とか福本日南とか數名の學生が放校せられたので學校側の冷酷に憤慨し、自ら進んで退學したのであつた。南部の鼻曲りの眞面目を發揮したのだ。而して退學後彼は中江兆民居士の許に身を寄せて佛語と法學の研究を續けた。

加藤子は夙に父の家を離れて他家に入り、原氏は父を失つて打擊を受けた。加藤子の家庭生活は冷かでなかつたとしても、何處にか物足りない淋しさがあつたであらうと察せられる――彼が自ら意識したにせよ意識しないにせよ――之に反して打擊を受けた原氏は、そのために却つて慈愛と同情に滿ちた溫かな家庭の空氣に包まれて育つた。加藤子の學生々活は坦々たる太道を行くが如く單調にして平安であつたが、原氏の其れは波濤に浮ぶが如く、複雜にして不安

だつた。

原氏が實社會への踏み出しは、報知新聞記者であつた。報知新聞に於ける彼の役目は佛文飜譯係で、月給は拾貳參圓だつたが、犬養氏などの社說記者と待遇に等差はなかつたと、其頃から同社に居た現社主の三木善八氏が語つた。併し犬養氏等は其頃既に一かどの政治家であつて、大隈、三菱など云ふ保護者を有して居たので、新聞社の給料などは眼中になかつたであらうが、原氏は維新の際に朝敵扱ひされた南部藩の出身だから、官邊に援助して呉れる先輩もなく、民間に賴るべき政治家もなく、孤影煢々として甲州邊の某新聞に論文や飜譯物を寄書し、一回五十錢位の報酬を有り難く頂戴したものだ。

明治十四年、時の太政官大書記官渡邊洪基氏が政況視察のため東北地方を巡遊するに對し、彼は報知新聞記者として氏の一行に加はり、その紀行を紙上に連載したが、歸來偶々羽田恭輔氏が政府の旨を受けて大阪に大東日報を創刊す

るに會し、渡邊氏の推薦によりて該紙の論說記者となつた。當時政府の機關紙としては、東京に東京日日新聞と明治日報があつて、前者には福地源一郎、渡邊安積、關直彥、穗積八束の諸氏が居り、後者には丸山作樂、三崎龜之助の諸氏が控へて、大東日報と東西相呼應した。渡邊、三崎の兩氏は明治十五年、關、穗積の兩氏は同十六年共に東京大學を卒した當時の秀才であつたが、彼が透徹の立論と犀利の筆鋒とは彼等を壓して輝いたものだと云ふ。

彼が彼の恩人井上馨侯に知られたのは大東日報記者時代であつた。明治十七年朝鮮事件に關し、井上侯が特派大使として彼地に赴くに際し、彼は長崎に於て侯に面談し（侯の一行に加はつて朝鮮に行つた？）たのが始まりて、爾來大に侯に愛せられ、同年（？）外務省準奏仕に出し、累進して天律領事となつた。是れ實に彼が登龍門で、天律條約の際、伊藤公の下に働いて大にその才幹を認められ勳六等に敍せられた。今でこそ勳六等位は何んでもないが、當時では大

したものだつたのだ。

次で擢んでられて巴里公使館附三等書記官に任ぜられたが、實は彼の希望によりて、外務省から巴里に留學せしめたのである。之は專ら井上侯の取なして、侯は駐佛日本公使に宛て、彼のために親切な紹介狀を書いた。その大意は『原は才幹ある人物であるが、まだ學問の方が物足らぬ。兩三年も其地で修學したら將來有用の材となるだらうと思ふから宜しく賴む』と云ふのであつた。彼が其夫人(先夫人)の父なる中井弘氏を通じて井上侯に近いたかのやうに思つて居る者もあるが、それは全然誤りである。彼が中井氏を娶つたのは、井上侯に知られて官界に出た後のことだ。

九

明治二十二年、井上侯が入閣して農商務大臣となつた時、原氏は侯に呼び寄せられて巴里から歸朝し、農商務大臣秘書官となつた。それから岩村通俊、陸奥宗光の二代にも其まゝ秘書官として歷任したが、彼の運命は陸奥伯に會つて急速に展開した。陸奥伯は明察果斷、深刻徹底の才人で、幾分人を毛嫌ひする癖はあつたが、好んで後進を扶掖し、殊に敏活犀利にして直言不偉の硬骨漢を愛した。原氏の如きも此點に於て最も伯に愛せられた一人で、彼は苟くも自分に理があると思へば、陸奥伯と抗爭して下らず、遂に陸奥伯が『自分は大臣として秘書官たる君に命令する』と强壓すると、彼は『命令とあれば其通りにやりますが、道理では斷じて閣下に服しません』と言つたものだと云ふ。凡てが此調子であつたさうである。彼の人物如何を陸奥伯に問ふ者があれば、伯は『彼は大臣を大臣とも思はぬ奴で、乃公の言ふことでも容易にきかない。兎に角面白い男ぢや』と答へたものだと云ふ。

其の頃の事、或日彼は多くの大官と共に或る富豪の宴會に招待された。其日は

雨上りであつたが、彼は庭園を散歩して居る間に、白足袋（彼は常に白足袋を用ふる）に泥がはねあがつた。彼は其まゝ座敷に上り、衆客環視の中で、仕立下ろしの縮緬の座布團を取り、其れで足袋に付いた泥を拭一拭して、座敷の隅にポンと抛りやつたものだ。某大官此樣子を見て『あの小僧は偉い者になる』と傍人にさゝやいたと云ふ話がある。

加藤子は大學を卒業すると直ぐに三菱に入つた。三菱では豐川良平氏が明治十二年大學卒業の末延道成氏を採用してから、大學との間に聯絡が付き、次で山下勇太郎、磯野計、增島六一郎など云ふ連中が三菱に入り、彼も亦彼等の後を追ふて横濱支店の一員となつたのである。尤も彼は尋常普通に三菱に入つたのではなく、當時既に彌太郎氏の愛孃の聟として選に當つて居たらしい。彼が大學を卒業した頃、彌太郎氏はその愛孃壽治子のために聟を探して居たが、彼と鈴木充美と由布武三郎であつたか誰れか三人（同期卒業）その候補者に見立て

られて彌太郎氏から晩餐に招かれた。その席には無論壽治子孃が出て接待したが、鈴木と由布とは彼女の聟選びだと云ふことを嗅ぎ付けて居たので、彼女に向つてベチャ〳〵有らん限りのお世辭を捧げたものだ。所が彼は一向にそんな內情を知らぬものだから、眼中彼女なきもの丶如く、例の通りブッキラ棒の無愛相に振舞つた。然るにそのブッキラ棒の無愛相が偶然にも彼女と彌太郎氏とに氣に入られて選に當つたのだと云ふ話があるが、事實であるか何うか私は知らぬ。

扨て彼は間もなく小樽の支店長として拔擢された。拔擢と云ふよりも寧ろ順序を追ふて一わたり見學させると云ふ趣意と見るのが當つて居るかも知れぬ。彼は小樽に赴任して暫く樣子を見て居たが、一日社用の紙で鼻汁をかんだ事務員を發見して直ちに之を馘り、更に使用人を淘汰して經費を節減し、快刀亂麻を斷つ的の勢で事務を整理した。そこに社主彌太郎氏が支店を巡視して彼の功蹟を賞し、自分の携へて居た金時計をはづして、それを彼の胸にかけてやらう

としたが、彼はそれを辭退し、自分はまだ金時計などを携へる身分でないから、暫く御手許に預つて置いて貰ひたいと言つた。彌太郎氏は更に益々彼の殊勝な心掛けに感心しながらも、時計を引き込めやうとすると、彼はその凹んだ冷靜の眼を一閃して、何うか一札の預證文を頂きたいと申し出た。この意外の要求には流石の彌太郎氏も心私かに畏敬の念を起したと云ふことである。そして彼は明治十七年に本社に歸り、壽治子孃と結婚した。恰度原氏が外務省準奏任となつた年だ。

次て彼は英國に行き、ピーオー會社の事務員となつて、具さに海運事業を研究して歸つたが、其前後のことであらうと記憶する。三菱社は共同運輸會社（大隈侯の糧道を絶つの目的で、三菱を潰すために藩閥政府が後援して設立した會社）と合同して郵船會社となり、森岡正純氏がその社長となつたので、彼は折角の蘊蓄を施す所なく、聊か不平て居た折に、恰度大隈侯が藩閥と妥協して政府に入り（廿一年二月）外務大臣の椅子に着いたので、是れ幸ひと侯の秘書官になつた。恰かも原氏が井上農商務大臣秘書官に任じた前年である。在任中彼は先輩同僚を捕へては議論を戰はし、傍若無人に彼等をやり込めたものだと云ふ。某老外交官が當時を語りて『何しろ大隈、三菱と云ふ背影を背負つて、頭が好いと來て居るので、なか〳〵鼻息が荒かつたよ』と言つて居たのを聞いたことがある。彼は出入共にいつも大隈侯の馬車に同乘したが、爆裂彈事件の當日に限り同乘して居なかつた。爆裂彈は恰度いつも彼が腰掛ける場所に當つたので、同乘して居れば粉微塵にやられるところだつたが、實に幸運であつた。

十

加藤子は一番で大學を卒業すると直ぐに日本一の富豪三菱の御聟樣となり、三菱の關係で大隈侯と結び付けられ、何の心配も手數も要しないで、手腕を試

むる場所と機會を得た。原氏は學校を中途で退學し、その才學を世間に證明する卒業證書を有せず、背影と言へば維新の際に朝敵の名を蒙つた南部藩の不利益な影ばかり、先づ以て手腕を試むる場所と機會を得るのが大骨折の仕事であつた。辛つと井上侯に見出され、陸奥伯に寵用されるまでの彼の奮戰苦鬪は察するに餘りある。犬養氏や尾崎氏の如き苦節三十年とか云つて、官吏となつて立身した者を安樂のやうに思ふものもあるが、犬養氏や尾崎氏は三田の大先生と呼ばれた大きな背影があつて、その關係で直ちに大隈侯と結び付けられ、原氏が外務省準奏任として月給八十圓か百圓貰ふ頃には、彼等は既に押しも押されもせぬ天下の大政治家であつた。彼等は官界に於てこそ手腕を試むる機會を有しなかつたけれども、政黨の方面では最初から領袖で、學窓を出でゝ直ぐに手腕を試みる大きな場所と好個の機會とを得たのである。彼等は陣笠の悲哀を味つた經驗はないのだ。彼等の大將大隈侯も其通り、彼は薩長の元勳と異つて、討

幕の苦勞もせず、鳥羽伏見の戰爭が濟んで明治政府が建設された後に、一書生から直ちに高官となり、間もなく參議となつた幸運兒である。

東北出身の平田子や後藤男、肥後出身の清浦子、長崎出身の伊東子、中國出身の田男など、その今日あるのは並大抵の苦勞ではなかつたであらう。彼等は多くの競爭者が篩ひ落され篩ひ落された後に殘つた者だ。犬養氏や尾崎氏などが最初から領袖であつたのとは大に樣子が異ふ。その代り彼等官僚出身者は篩はれ篩はれて居る間に、元氣は消磨し、天眞は散失し、或は甘蔗の滓のやうな無味乾燥の人間となり、或は面從腹非の狡猾爺となつて仕舞ふ者が多い。所が犬養氏や尾崎氏の如く、年少で政黨の領袖となつた者は、コセ〳〵した所、陰險狡猾な點はないが、其代り經驗が足らないので空論に陷り易く、徒らに大言壯語するばかりで、實際の用には立たぬ者がある。

然るに原氏は大臣と爭つて却つて愛せられ、縮緬の座布團で足袋の泥を拭い

て、却つて『偉い者になる』と賞められると云ふ調子で官界の初期を經過したので、幸ひに一般官僚的臭味に感染すること少なく、隨分奮戰苦鬪はしたが、そのために彼の人格の內容は益々强くなり大きくなり複雜となつて行つた。加藤子は一般官僚の如く元氣を消磨し天眞を失ふほどの苦勞もなく、犬養氏や尾崎氏の如く空論に陷る弊からも免かれ、社用の紙で鼻汁をかんだ事務員を馘つて金時計を頂戴し、預り證文を貰ひたいと言つて畏敬されると云ふ調子で、計數的に合理的に社會生活の初期を經過したのである。

加藤子は明治廿二年十二月、大隈侯と共に辭職し、暫らく閑散の地に居たが、段々伊藤公に接近し、公の推薦で大藏省參事官に任ぜられた。三菱は事業の關係上からであらうか、伊藤公を敵に廻はすことが出來ず、伊藤、大隈の妥協提携を理想とし、伊藤公に偏せず、大隈侯に偏せず、その中間を步むことを三菱の方針と定めたと云ふことで、彼が大藏省に入つたのは、伊藤公と三菱との

關係を語るものであつた。

それから彼は明治廿四年七月には一躍銀行局長に進み、監査局長を經て、廿五年八月主稅局長に轉じ、廿七年七月外務省に飛び渡つて特命全權公使に任じ、政務局長を兼ねたが、その十一月公使專任となつて、英國に駐劄することゝなつた。これは彼の希望でもあつたであらうが、時の外相陸奥伯の方でも亦彼を引つ張つた。陸奥時代以前の外交官は、鍋島侯や戶田伯や秋元子や、全權公使に任ぜらるゝと云つた風で、間に合はせの者が多かつたが、陸奥時代から段々日本の國際的交涉が複雜となつて行くにつけ、彼は將來の外交官は素人では間に合はぬと言つて、新らしい學問をした若手を求め、銳意外交官養成に努力したもので、所謂外務省閥なるものは、その頃に芽を出したのである。

原氏は明治廿五年八月、陸奥伯が外相に任ずると同時に、外務省に入つて通商局長となつた。恰度加藤子が主稅局長となつたのと同年同日で、局長に陞つ

たことは加藤子に一年後れて居る。それから彼は廿八年林薫伯の後を襲ふて外務次官に進み、廿九年陸奥伯が野に下ると同時に轉じて朝鮮駐劄公使となつた。而して彼の後任は朝鮮駐劄公使小村壽太郎侯で、彼と小村侯と互に入り代つたわけだ。所が同年の秋に、松方内閣が出來、大隈侯が入つて外務大臣となつた時、彼は飄然として朝したまゝ再び任に赴かず、翌三十年二月辭職した。

十一

原氏は明治三十年一月特命全權公使を辭すると同時に、全く念を官界に斷ち大阪毎日新聞社長となつた。何事にも全力を傾注する彼は、文章、編輯、印刷、營業等一切に渡りて獨自の研究を重ね、口語體で論文を書いたり、講談を掲載することを始めたり（口語體で論文を書くこと、講談を新聞に掲載することは自分が元祖だと彼は自ら言つて居るが、私はまだ調べて見たことはない）漢字

節減をやつたり（可しをべし、爲すをなすと書くことに定めたことなど）在職二年の間に、大阪朝日に拮抗して遜色なきまでの基礎を築き上げた。

明治三十三年秋、政友會の創立せるゝに及び、彼は毎日社を辭して上京し、政友會に入つて幹事長となつた。彼が政友會に入つた頃は、自由黨出身の地方代議士等は『あの派手なニクタイをかけた白髮頭の男は誰だい。いやに樣子振つて濟まして居るぢやないか』などゝさゝやき合つては冷笑して居た。そこに彼が幹事長になつたと云ふので、あんな長袖者流に政黨の幹事長が勤まるものかと言つて、伊藤總裁に苦情を持ち込む者すらあつた。此處でも亦彼は新たな辛苦を味はねばならなかつたのである。唯だ幸ひに伊藤總裁が彼を信じて疑はず、星亨氏が陰になり日向になつて彼を援護したので、彼の地歩は着々と安固になつた。伊藤總裁は彼の惡評者に向つて『彼はなか〳〵偉い人物ぢや。政友會に來て居る役人出身者中、彼が一番見込がある』と言つたさうである。星亨

氏は陸奥伯と深い因縁があり、伯の乾兒と言つても可かつたので、彼のためには兄分と云ふ關係であつた。

明治三十三年十月第一次政友會內閣（第四次伊藤內閣）成立し、その十二月遞信大臣星亨氏が辭職したので、彼は其後任となつた。初め貴族院方面から星排斥運動が起つた時、伊藤首相は心中星氏の辭職を希望して居たけれども、剛愎な彼がオイそれと之を承諾すまいと思つて頗る苦悶の態であつた。此伊藤首相の胸中を察したのが岡崎邦輔氏で、彼は星氏と相談の上、穩便に辭表を提出する代りに、原氏を後任にして貰ひたいと云ふことを伊藤首相に申出でた。伊藤首相も原氏に不足はなく、寧ろ大滿足で直ぐに原氏を伴つて參內し、電光石火の如く星氏の辭職と原氏の親任式が濟んだ。豫て星氏の後釜をねらつて居た都筑馨六氏は、星氏が愈々辭職の決心をしたらしいと聞き、岳父井上侯の添書を携へて伊藤首相を訪問したが、其時は既に首相が原氏を伴つて參內した留守中

だつた。岡崎氏は人も知る如く陸奥伯の門下生で且つその親族である。

第一次政友會內閣は、第十五議會で貴族院から散々にいぢめられ、大詔煥發でやつと之を通過し得たかと思ふと、今度は渡邊藏相の豫算緊縮論で內輪に大紛議が持ち上り、生命僅かに七ヶ月で、三十四年五月には總辭職と云ふ悲運。それに引き續いて六月廿一日には柱石星氏の橫死で、政友會は泣き顏に蜂と云ふ言語同斷の目に會つた。

所が原氏個人としては兄分を失つて都合の惡いこともあつたらうが、彼の黨人的修養のためには却つて好い機會を得た。岡崎邦輔氏は村野常右衞門氏等と謀り、星氏の根據だつた關東團を擧げて彼を後援することゝなり、彼は星氏の後繼者と云つたやうな地位を占めたのである。三十四年秋、伊藤總裁の外遊に際し、その留守中の會務及び緊急事件を決行するため、五人の常務委員を設けたが、彼は松田正久、尾崎行雄、片岡健吉、大岡育造の諸氏と共に其一員となつ

た。彼が役人出身の中から唯だ一人伊藤總裁に選ばれて常務委員となつたのは、その敏活犀利にして硬骨なる、口八釜しいスレッカラシの黨人と應酬してヒケを取らぬと云ふ所を見込まれたのであらう。彼が早くも黨界に順應し得たのは、新聞界に居た經驗の結果かも知れぬ。

十二

原氏は政友會に入つた翌々年、即ち明治三十五年の衆議院議員總選擧で、鄕里盛岡市から選ばれて初めて代議士となつた。四十六歳の時だ。彼が一度び衆議院に議席を占むるや、尾崎行雄氏、片岡健吉氏、大岡育造氏など云ふ黨界の先輩は段々と影が薄くなり、彼は關東、東北の背影を負つて、九州の棟梁松田正久氏と雁行しやうと云ふ勢力を示した。彼は周圍の一人から、地方の一團體から、段々と足場を作り固めて進んだ。關東團の森久保作藏氏等は星氏の代り

として尾崎氏を守り立てやうとしたが、『天下の尾崎』と自ら高く標榜して居る彼は、一局部の足場など眼中になかつたてもあらうが、擔ぎ上げやうとする方でも、彼が餘りに足元の見えな過ぎるのに愛相をつかして手を引込めた。

斯くて尾崎氏去り片岡氏離れ、末松、金子、都築等官僚出身の諸氏が悉く伊藤公に從つて政友會を逃げ出した後は、彼は松田氏と共に西園寺總裁の双翼となり、そして松田、原と呼んで居た世間は、何時の間にか原、松田と呼ぶやうになつた。

是から時代は桂、西園寺の妥協に入るのであるが、其間に於ける原氏の經歷は世の耳目に新たなる所で、玆に記述する必要はなからうと思ふ。唯だ妥協時代に入る前提たる桂内閣と政友會の戰に就て一通り述べて置きたい。

第十六議會は伊藤總裁の外遊中に開かれたが、政友會幹部の意嚮は、絶對多數の威力を以て桂内閣を苦しめるだけ苦しめ、前議會に於ける復讐をやらうと云

ふことに一致し、政府の財政計畫に反對の決議を發表した。然るに憲政本黨（進歩黨）は十五議會中から官僚派に秋波を送つて居たが、政友會の此態度を見るに及んで機乘ずべしとなし、院内總理武富時敏氏は桂公を訪ふて妥協を遂げ、そして『政府は今後政友會に對して交渉することはないか』と問ふた所が、桂公は『斷じて然樣なことはしない』と答へた。そこで憲政本黨は直ちに代議士會を開いて、政府の財政計畫全部に贊成の決議を發表したものである。

所が桂公は武富氏が歸ると直ぐに政友會に向つて妥協を申込んだ。そこで桂首相、山本海相、松田正久氏、尾崎行雄氏（原氏はまだ代議士ではなかつた）の四人が帝國ホテルに會して妥協に取りかゝつたが、議容易に纏らず、更に政友會は井上侯の周旋で協議會を催ふし、政府に妥協案を提出したが政府は之に應ぜず、更に第三の讓歩案を提出したけれども談判は遂に不調に終つた。そこで桂公は外遊中の伊藤總裁に電報を送つて愁訴し、磨つた揉んだの揚句、兎も角

政府と政友會の妥協が成立したのである。尾崎氏が一身四樣使ひ分けの演說をやつたのは此時だ。

伊藤公は日露同盟論者で（尾崎氏は此外交方針に贊成と云ふ理由で政友會に入つた）その外遊は之を實現するためらしかつたが、それが却つて日英同盟を速かならしめ、三十五年春、彼は散々の機嫌で神戸に歸着した。山縣公や桂公はモウ喧嘩腰である。彼が歸朝して若し日英同盟に對し難癖を付けるやうな擧動があつたら、此機會に乘じて彼を政界から葬つてやらうと云ふ腹を定めて居た。此間の消息を知れる加藤高明子は、急遽彼を神戸に迎へ、桂公等の心事を告ぐると共に、外交に就ては一語をも批評しないやう忠告した。それで彼は一時蟲を殺して箴默したが、扨ても此欝憤は何れの處にか爆發しなくては止まぬ運命を持つて居たのである。

三十五年八月の總選擧は政友會百九十一人（原氏は此時議會に入つた）、憲政

本黨九十三人、帝國黨十七人、壬寅倶樂部二十八人、同志倶樂部十三人、無所屬三十四人と云ふ結果で、政友會は依然絶對過半數を占めた。第十五議會以來、山縣公や桂公に含む所多かつた彼伊藤公は、今や此大衆を率ゐて第十七議會に殺到せんとするのであつた。

問題は矢張り財政計畫反對であつたが、彼は順序として先づ山縣公を訪ひ、增租繼續と海軍擴張の二案を撤回するやう政府に勸告しては何うだと說いた。それで山縣公は一應桂公にその旨を通じたが、桂公は直接彼と會見して彼の勸告を拒絶した。

是より先き彼と大隈侯との間には加藤子の斡旋で既に聯合の道が開けて居たので、桂公が伊藤公の勸告を拒絶すると直ぐに彼等兩雄は駿河臺の加藤邸で會見し、西園寺公と加藤子とが倍席した。そして此會見で政友會と憲政本黨は聯合して政府に突擊することに決し、兩黨は同日に各大會を開いて之を公表したのである。

十三

伊藤、大隈、兩雄の聯合は實に天下の壯觀であつた。增租繼續案は特別委員會で否決せられ、即日本會議に上程されて一氣呵成に葬り去られやうとするや、忽ち議會は五日間の停會を命ぜられた。

停會中、政府は一生懸命に民黨を攪亂しやうと試みたけれどもその效なく、兒玉臺灣總督が伊藤公に會見して調停しやうとしたが、それも即座に拒絶された。次に近衞貴族院議長、黑田同副議長が貴族院六派の同意を得て民黨に會見を求めたが、民黨は妥協は非立憲であると云ふ理由で之を拒絶したけれども、强いての要求に止むを得ず、枉げて片岡、尾崎、原、大石の四氏が代表者として會見だけはしたものゝ、彼等は交涉に入ることを謝絶して貴族院の調停案を

見やうともしなかつた。

そこて近衛議長は、今度は政府に向つて增租繼續案の撤回を勸告したが、是れ亦政府の容るゝ所とならず、議會は再び七日間の停會となり、兒玉總督が再度伊藤公に妥協を申込んだので、伊藤公自ら紹介者となつて、松田、原、犬養、大石の四氏と桂首相、山本海相、曾禰藏相と會見し、政府から妥協案を提出したが、それも纒まらず、遂に議會は解散された。

解散は何等の勢力をも政府に加へなかつた。總選擧の結果政友會は二名を增加して百九十三名となつたものだ。所が特別議會開會前、大阪に博覽會開會式と神戸に觀艦式の擧行があつて、代議士連が之に參列するため阪神の地に集まつた機會を利用し、大浦警視總監の妖魔の如き手は夕立の雲の如く忽ちの間に彼等の上にひろげられた。その結果として政友會員八十餘名連判して大阪に會し、會の組織變更を名として、檄を飛ばして同志の叫合に取りかゝると、さア

集まるワ集まるワ、百人になるか百五十人になるか判からぬと云ふ勢。幹部は悉く色を失つた。所謂大阪一揆なるものがこれだ。

彼等は第十七議會では增租反對と言ふ好題目のために謀反も出來ず、何うせ內閣の方が倒れるだらうと豫期して勢込んて居たが、意外にも議會が解散となり、『前代議士は之を候補に定むべき事』と云ふ會の決議をせめてもの慰めに選擧區に歸つて見ると、選擧區民は議會が何うしたかと言つた風。有志家と自稱する者などは儲け仕事が出來たとはしやぐ位なもの。此方は彼等が手辨當で運動して吳れさうなものと思つても、矢張り金を使はなければ當選は出來ず、資力が續かぬ者は、國民のために働いて國民から捨てられると云ふわけになつて來る。二度の解散風に對しては彼等も大に考へざるべからずとあつて、風を望んで軟化したのてあつた。

一方に於て桂首相は大阪茶臼山で伊藤公と密會し、露國と開戰するの餘儀な

き形勢を論じたので、公も大體に於て之を認め、特別議會に入るに先ち、專斷を以て桂首相と妥協して仕舞つた。是に於て尾崎氏去り片岡氏去り、伊藤總裁自身も亦任を西園寺公に讓つて樞密院議長となつた。伊藤總裁の妥協及び樞府入りは、自ら他に說明することの出來ない理由（日露戰爭の準備）があつたのであるが、黨員の腰拔けには彼も愛相をつかしたに相違なからう。

斯くて桂、西園寺の妥協時代が來た。實に此妥協時代は、解散を受けて苦しんだ者と、解散を行つて苦しんだ者とが泣き寄つて作つたものだ。解散を受けた者の苦しさは勿論であるが、解散を行つた者の苦勞も一通りではなかつた。それに桂公としては、幾度解散しても自分の味方を增加するではなく、單に相手に苦痛を與へて消極的の利益を期待するに過ぎぬ。政黨內閣は憲政の原則であると言つても、それは憲政が出來上つてからのこと。憲政は作られたものでなく、生長したものである以上、當時の日本に於て政黨の力が乏しかつたとすれば、政

黨內閣の實現すべき筈なく、假りに超然內閣に道理ありとするも、實際に於て通用が圓滑に行かなければ、政黨に賴るより致方がない話で、桂、西園寺の妥協は實際政治家として止むを得なかつたであらう。實に當時戰に疲れて居たのは獨り政友會と言はず、憲政本黨も政友會から置いてけぼりを食つた後に、彈劾上奏案を提出することは提出したが、それは喧嘩過ぎての棒ちぎりで、政友會が妥協の結果解散に會ふ氣遣ひがなかつたからのこと。最初の間は政友會同樣軟風大に吹きすさんで、具體的に對議會態度を定むることすら出來なかつた位である。

十四

加藤子は英國に駐劄すること七年餘で賜暇歸朝中、明治三十三年十月、第一次政友會內閣（第四次伊藤內閣）に入つて外務大臣となつた。原氏が逓信大臣に

なつた二ヶ月前である。明治十八九年以來――寧ろ明治初年以來、外務省の大問題だつた條約改正は、既に陸奥伯が解決して居たので、外務省の仕事としては是れぞと云ふ重大なものもなかつたし、政黨には關係しなかつたし、彼は在職七ヶ月の間、居るか居ないかも分からぬ位で辭職した。

明治三十五年の總選擧で、原氏は鄕里盛岡から、彼は三菱の鄕里高知縣から共に選ばれて衆議院に入つた。斯くて第十七議會に列し、彼は伊藤、大隈兩雄を結び付ける大役を勤めたのである。原氏が政友會の一闘將として戰線に立ち、汗みどろで戰つて居た時、彼は超然として帷幕の内に總大將と應酬した。實に彼が代議士としての初舞臺は華やかて且つ堂々たる押出しであつた。是れ勿論一個の加藤高明として出來る役ではない。寧ろ三菱がやつたと云ふ方が判りが早いのだ。それにしても彼が尋常一樣の男てなかつたことは言ふまてもないけれども、その單調なる七年間の英國生活は益々彼の人格を單調ならしめ、單調に

して硬骨な彼は、早く高地位に陞つて（彼は原氏より四歳の年下て、外務大臣になつた時は四十歳てあつた）、氣位ばかり高くなつた。

彼は第十七議會解散後、三十六年の總選擧には伊藤公、大隈侯及び政友會の熱心な援助の下に、奥田義人氏と轡を並べて横濱市から候補に立ち、島田三郎氏と激戰したが、自分を代議士として適當であると信ずる者は投票しろいやならよせと云ふ態度で、戸別訪問は勿論やらず、有志家にすら鼻の先きて應對すると云ふ有樣だつたので、選擧人の反感を買ひ、散々の態で落選した。所が幸ひにも奥田氏が鄕里鳥取縣でも當選し、横濱の方を辭したので、彼はその補缺として辛つと當選することが出來た。斯くて第十八議會を經、第十九議會が河野議長の奉答文事件で解散となつて以來、彼は低級下劣の選擧に懲りたのか、また代議士候補に立たうとしなかつた。そして伊東巳代治子から東京日々新聞を買ひ受け、盛んに桂内閣攻擊の論陣を張つたものてある。

是より先き伊隈聯合は遂に失敗に終つたけれども、彼は尙ほ政黨聯合の希望を捨てず、第一次桂內閣の間、時々主人となつて松田、原、犬養、大石の四氏を會し、兩黨の意見疏通に努めた。そして三菱を中心として比較的親密な犬養、大石兩氏とは、桂內閣の後繼として、山本權兵衞伯を首相としたる政友進步兩黨聯合內閣を作るべく密議したと云ふ。

所が第一次西園寺內閣は犬養、大石氏等には一言の挨拶もなく組織せられ、加藤子は入つて外務大臣になつた。大石氏等は憲政本黨に對しても一人位の入閣交涉があるかと思つて居たらしいけれども、さればとて西園寺公に向つて文句の付けやうはなかつたが、加藤子が彼等と離れて一人入閣したと云ふことに就ては彼に向つてひどく嫌味を言つたさうである。彼が鐵道國有に反對して辭職したのは之がためだと言ふ者すらある。けれども、私は彼が單に辭職せんがための口實に鐵道問題を用ひたとは信ぜぬ。併し『旁々』と云ふやうな考へはあ

つたかも知れない。多分あつたであらう。

辭職後彼は專ら新聞經營に從事したが、なか〳〵思ふやうに行かず、毎月莫大の缺損し氣を腐らして居る折柄、明治四十一年七月第二次桂內閣が成立し、彼は桂公の勸めによつて全權大使に任ぜられ、英國に駐劄することゝなつた。當時桂公はその片腕と頼む小村侯の病氣が益々進む一方で、モウ到底長いことはないと思つて居たので、心ひそかに小村侯に代はるべき外交家を物色し、結局彼に見込みを付けたのであつた。

彼と桂公との關係は是から始まる。彼は大隈侯に依つて初めて官界に入り、次に伊藤公に引立てられ、更に桂公と結んだ。三菱の背影を有する彼は人に頼らうとさへ思へば、誰れにでも頼られぬと云ふ人はなかつた。寧ろ方々から引つ張られた。彼の過去は實に仕合せな生活だつた。而かもその仕合せが却つて身の仇とはならなかつたであらうか。

十五

加藤子が英國に駐劄した間、桂公は朝鮮を併合して公爵に陞り、その功名心と自惚心とは高潮に達した。そして更に手を支那に延ばし、東洋の覇王としての日本の基礎を確立しやうと云ふ大野心燃ゆるが如く、之を實行するために強力なる政黨と手腕ある外交家とを渇望した。

桂公は此計畫を遂行する好個の相棒として加藤子を見出したのである。桂公は彼を駐英大使に任ずる時、既にその最も信頼せる小村侯の後繼者として屬望したのであつたが、今度は更に政黨組織の助手として彼を利用しやうと企てたのであつた。彼の背影たる三菱金權王國、大隈侯、是れ政黨組織の道具として何より結構のものに違ひない。伊藤公が政友會を組織した時には井上侯を通じて實業家の加入を勸誘したけれども、目ぼしい者は一人も應じなかつたが、桂

公は乃公と三菱との勢力を合はすれば、實業家を集むること容易であると思つたであらう。そして大隈侯には政黨關係の勢力があり、之に政友會の投降者を加ふれば天下無敵の大政黨が出來上ると思つたであらう。彼が明治四十五年の歐洲旅行は此野心を遂行するための準備を整ふるためであつて、彼は英國に於て加藤子と會し、後藤新平男と三人鼎坐、謀議を凝らす豫定であつたが、偶々明治天皇崩御の急電に接し、露都から引返したのであつた。

然るに桂公が加藤子を引き付けやうとする程、加藤子は桂公に共鳴して居なかつたらしい。尤も桂公の計畫を具體的に聞く機會もなかつたのであるが——四十四年冬賜暇歸朝の際外交上に就て意見を交換したことはあつた——元來彼は桂公の人物に多くの敬意は拂つて居なかつたであらう。大正元年冬第三次桂内閣が組織せられ、彼は政府の招電に接して歸朝したが、當時例の憲政擁護運動の騒ぎが盛んであつたのを見たからでもあらうけれども、彼は一寸入閣を躊

躇した。そして正式に桂公から入閣の交渉を受けた時に、先づ左の三ヶ條に就桂公の諾否を質した。

(一)近來軍人が外交上に啄を容るゝやうてあるが、彼等の外交的知識は一局部に偏して世界の大體に通じて居ないのであるから、彼等のために外交方針を動かさるゝと云ふのは實に危險千萬てある。故に自分は總理大臣と相談する外、他の何者の容啄をも之を排斥する覺悟である。首相は果して之に贊成するのみならず、自分を助けて能く獨立獨行せしむることを得るか如何と云ふ意味。(二)行政財政を整理して四五千萬圓を捻出しなければ、我財政は危險であると思ふ。首相の覺悟如何と云ふ意味。(三)現在世間は閥族打破と稱して大に騷いて居るやうてあるが、首相は此難關を切り拔ける成算を有するか。自分は兩度短日月の大臣を勤め、大に迷惑に感じたことがあるから、此點に就て充分首相に成算がなければ就任を謝斷したい。首相の覺悟如何と云ふ意味。

右の三ヶ條は當時私が桂公の昵近者から聞いたのであるが、多分事實だらうと思ふ。中にも軍人外交は彼の最も不平とする所で、彼は曾て私に向つても之を說き『桂公なら軍人の容啄を排斥する事が出來ると思つた』と語つた事がある。

桂公は彼の註文に對して、一も二もなく悉く大呑み込みに之を引受けた。誰れにしても引受けざるを得まいてはないか。彼の註文は一見實に堂々たるもので、單に大臣の椅子にありつきさへすれば滿足と云ふ普通一般の政治家とは確かに選を異にして居るけれども、茲にも彼は例の演繹論理家の弱點を曝露して居るやうに思はれる。

十六

加藤子が入閣の條件として桂公に質問した三ヶ條の內、行政財政の整理は西園寺內閣がやりかけて陸軍の反對のために行詰つたものであるから、桂公の言

質を取つて置く必要は確かにあつた。軍人外交云々の件も亦重大の條件ではあるが、苟くも總理大臣たる者が、軍人の容喙を排斥する覺悟があるかと問はれて、イヤそれは困難だから請合ひ兼ねると答へ得るだらうか。何うせ『承知しました』と答ふるにきまつて居る。『自分を援けて能く獨立獨行せしめ得るか』と云ふ質問に對して、私には力が足りませぬと答ふる總理大臣が何處にあらうか。斯やうな抽象的の言質を取つて置くのは、後で喧嘩をする時の議論の材料にはなるてあらうが、事務を進むる上に於ては如何ばかりの價値にもならぬ。彼が私に語つた如く、眞に彼が桂公ならば軍人の容喙を排斥する力量があると、彼が桂公其人を信じたならば、それで充分ではなかつたか。彼の質問に對して桂公が何う答へるかは初めから定まつて居る。その定まつて居る答を形式を整へて言葉に現はして置かなければ氣が濟まぬと云ふのが彼の演繹的人物たる所以である。議論家たる所以てある。而かも彼は事實の觀察に就て聊か誤まつて

は居なかつたらうか。彼は桂公ならば軍人の容喙を排斥し得ると思つたと言ふが、桂公自身が軍人外交家てあつたのだ。彼は桂公によつて軍人の容喙は排け得たとしても、彼と桂公と衝突する恐があるとは思はなかつたのか。

若しそれ憲政擁護運動を切り拔け得べきか否かを桂公に問ふに至つては、實際眞面目に開き直つて入閣の條件としたとすれば、―― 唯だ餘談として話し合つた位ではあるまいかと思ふが―― 餘りに人が好さ過ぎる。現在入閣を彼に勸むる桂公として、成算がないと答へる筈はなく、さアなか〳〵困難だが……などゝ言葉を濁すことすらありやうはない。憲政擁護運動を切り拔け得べきか否かは、之を他人に問ふまでもなく、自ら政情の實際に就て打算しなければならなかつたのである。見よ桂公の請合ひは眼前に無效となつたではないか。桂公は波濤の如き憲政擁護運動に對して、周章狼狽殆んど爲す所を知らぬと云ふ有樣で、內閣は一たまりもなく瓦解したのだ。而かも切り拔け得ると立派に彼に請

合つた桂公は、却つて彼の智慧を借りて西園寺公への詔勅を奏請し、以て一時を切り拔けやうとしたのだ。然うなつて元の約束は何うして呉れると責めて見た所で追つ付かない。要するに桂公の約束なるものは單に聲帶の振動に過ぎなかつたのである。そして玆でも彼は事實の觀察を誤まつた。當時彼は大詔煥發は必ずしも憲政の惡例ではないと言ひ、英國の例を擧げて桂公を安心させたと云ふことであつたが、生憎西園寺公は日本人で、英國通りにやらなかつたものだから、それで彼も亦大味噌を付けた。全體當時の形勢は讀んで字の如く閥族打破運動であつて――憲政擁護と云ふ意味は漠然たるものであつた――彼等運動者の言ふ所によれば『皇室を我物顔に振舞ふ閥族』に對する惡感情の爆發であつたのである。其處に持つて來て一人の政黨首領に對して詔勅降下だ。その結果如何と云ふことは少しく實際の事情を知つて居る者は斷言し得る程度のものであつた。尤も彼は最初總辭職を主張したらしいから、彼の高潔無垢な心事は

充分に之を諒とするのであるが、政治家としては、假令大詔煥發は立憲國として惡例ではないと云ふ理屈は立つとしても、それが何等の故障なく實際に行はれ得るか何うかを考慮し觀察しなければならぬのだ。政治は議論ではないのである。

彼は初め同志會に入ることを躊躇したが、既に詔勅奏請を勸め、桂公が大浦氏等の解散說を斥けて彼に同意したと云ふ因緣が付いて居るので、義理として入會を謝絕するわけに行かず、前に述べたやうな條件、即ち金を出さぬこと、無理な政權爭奪をしないことの二條件を附して入會したと云ふことであつた。此話も桂公の昵近者から聞いたのであるが、若し事實とすれば彼の理論主義は一の惡病となりかけて居る。これが若し原氏ならば、何うせ政黨に入る以上、持つた丈の金は絞られると覺悟の上で入るだらう、それが惜しければ初めから入らぬだらう。政權爭奪云々の條件は私としても可笑しい位に思ふ。政權爭奪

が嫌ひなら、自分がその通りに政黨を指導すれば可いてはないか。誰れにしても政權爭奪のために政黨を樹てると廣告する者はない。恐らく彼が斯んな條件を付けたと云のは誤りで、唯だ自己の理想を述べたに過ぎまいと思はれる。

大正二年晩春、彼は同志會に入會すると直ぐに支那漫遊に出かけた。彼の出發に際し桂公はその送別會を三田の邸で開いたが、將に食堂が開かれやうとする時、俄かに發熱して席に着くことが出來なかつた。是れが病氣の初まりで桂公は同年十月に亡くなり、同志會は十二月廿三日、彼を總理として結黨式を擧げた。彼は一朝擔ぎ上げられて大政黨の首領となり、原氏は一歩一歩と自ら踏みしめ踏みしめ、十五年の政黨生活を經て辛やく首領となつた。

十七

原氏はその經歷の複雜なると比例してその人格の內容も複雜で、加藤子はその經歷の原氏に比して單調なるが如く、その人格の內容も原氏に比して單調である。

最も單調なる人格と云ふのは——說明するまでもないが——本能、遺傳、及び僅かの經驗を內容として非我に對立した意誠の統一體であつて、更に平たく言へば、常識によつて身體を自我とする其自我は最も原始的の單調なる人格である。然るに人格が更に發達すれば、自我は非我に移動するのである。例へば幼兒が井戶に墜落しやうとして居るのを見れば、通りがゝりの他人でも走つて彼を抱き上げる。これはその通りかゝつた人の心內に於て、自我と非我とが轉倒し、自我が非我に移動したのである。平たく言へば自分が人の身になつて仕舞ふのである。我を忘れて人を助けると云ふのは、即ち自我が非我に移動し、俗に至ふ身につまされて人を助ける行爲となつたのである。その身につまされるのは同情で、同情が起つて『あゝ氣の毒だ』と云ふ心となつたのが慈悲、孟

子は之を惻隱の情と言つた。

斯やうに自我が非我に移動することは、一方から見れば自我が非我を包容消化することの多ければ多いだけ、その自我が非我を包容消化することで、その自我が非我の人格は複雜豐富となり、更に多くの經驗と修養と學問とによりて、その擴大の度を增加するに於ては、遂に宇宙即我、我即宇宙と云ふ大人格——釋迦や基督の如き——に達するのである。所が學問によつて知識が進むに從つて、同情、慈悲、惻隱の情とは斯う云ふものであつて、道德とは斯う云ふ行爲であると知つて居るだけで、自身には同情も慈悲も惻隱の情も起さず、道德を行ひ得ない者がある。即ち論語讀みの論語知らずは頗る多い。斯やうな知識は如何に多く之を腦中に貯へても、それを充分に自己の人格內に消化し理想化しない限り、人格の擴大とはならぬ。即ち外部の知識が人格の力となつた時に人格はそれだけ擴大するのである。故に實際に當つて苦勞した人でなければ人格の力たる眞

の同情は起らぬ。又實際に誘惑を受け、試みに會つた人でなければ當てにはならぬ。修身書には惡友と交はるなと言つてあるけれども、實は惡友とも交つてその誘惑に打ち勝つてこそ、益々人格を豐富にし人格の力を增加するのだ。可愛い子には旅をさせよと云ふ。

加藤子は苦しい生活の旅をしなかつた。單に是だけの原因からではないが、是も一の原因となつて彼の人格の內容は頗る單調で、他を包容消化する力が弱いやうである。單調と云ひ力が弱いと云ふも程度の問題であるが、少くとも原氏に比して單調でもあり力が弱くもある。彼が橫濱市で選擧を爭つた時に選擧人に對した態度は、一見男らしい立派なやうであるが、それは一般の投票乞食的候補者に比して立派であると云ふに止まり、私の目から見れば餘りに單調過ぎる行爲である。モット人格の內容が豐富な人ならば、そんな態度は取らぬ。彼が理想的選擧競爭をやらうとしたのであると云へば、一應尤もにも聞えるけれども、

そんな理想は理想と言ひ得れば低級な理想で、彼の場合に於ては、單に選擧は『斯々あらねばならぬ』と云ふ理屈を知つて居つて、偶々之を實行して見やうとした位のことで、充分に其知識が人格化され理想化されたものではなかつたと言つてよい。政治家の理想は治國平天下にあらねばならず、此大理想を實現せしむるためには、民衆を追ひ廻はしても投票を集むるのに何の恥づるべきことがあらうぞ。親は片輪な子ほど可愛いと云ふ。大宗教家は罪の衆生が可愛相だとあつて、逃げ廻はる彼等を追ひ廻はして罪から救つてやらうとしたてはないか。斯う悟れば何にも肩肘張つて、戸別訪問は弊害があると理屈をこねるにも及ばぬ。畢竟するに彼の人格内に選擧人を包容消化するだけの要素がなかつたから落選したのである。

そして彼は自尊心が強い。自尊心とは自分は自分で支配すると云ふことから起り、從つて自分は強いと云ふ意識が著るしく前面に露出して居る狀態である

が、人格の内容の豐富な人ならば、その自分は自分で支配すると云ふ意識は他の多くの意識――敬虔、謙讓の念の如き――と交錯調和し、純化したる狀態に於て柔かに之を保持するけれども、彼は内容が單調であるために、それが前面に露出するのである。此自尊心が一歩を進めて、自分の力を實力以上に誤信した場合が慢心と稱するものだ。成金輩に此慢心が多い。加藤子は例へば成金の如く、トン〳〵拍子に立身したので、横濱で候補になつた若い元氣の時代には、自尊心が昂じて多少慢心になりかけて居たかも知れぬ。只今では修養を積んで、慢心などは起さないだらうが。

十八

今は然うでもあるまいが、加藤子が同志會總理に成りたての頃は、黨員で訪問する者があつても、容易に面會しないと云ふ風であつたので、頗る評判が惡

かつた。或黨員が彼のために心配し、モット黨員と意思の疏通を圖るやうに努めては何うかと勸めた所、彼は如何にすれば疏通が出來るかと問ふた。時々飯でも一緒に食つて懇談をしたら可からうと答へたら、彼はケゲンな顏をして、飯を一緒に食ふと云ふことは交際てはないかと言つたので、勸めた人も呆れて返す言葉が出なかつたさうてある。

此話を聞いた黨員等、加藤は吾々と交際することが嫌ださうだ。流石富豪の華族樣は異つたものてある。如何さま平民輩が華族樣に面接すれば目が潰れるかも知れぬ。是れは此方から御免を蒙らずばなるまいと罵つて居た者もあつた。されど彼等は少々彼の意味を穿き違へたらしい。蓋し彼が言つた意味は、政黨の本體は主義政見てなければならぬ。政黨は交際團體ではない。黨員と交際しなければ意思が疏通しないとは不思議てあると云ふのてあらうと思ふ。如何にも彼が言ふ所、理義は明白に通つて居る。實に政治の禍は交際的政黨の膨脹て

ある。

所が東洋にては食客三千人的の人物を喜ぶ風がある。大隈侯の勢力人望の如きも確かに一半は斯うして得られたのてある。然るに彼加藤子は自分は食客と歌俳諧を弄ぶ趣味を有しない。政治を談じやうとならば別に其方法があると言ふてあらう。昔は孟嘗君の食客三千人、以て賢名を馳せたけれども、後世の史家は『吾曾て薛を過ぎる。その俗、閭里率ね暴桀の子弟多く、鄒魯と殊なれり。その故を問へば曰く、孟嘗君天下の任俠姦人を招致して薛中に入る。蓋し六萬餘家なり云々』と言つて、暗に孟嘗君を難じた。

星亨氏は孟嘗君の亞流らしい一面があつた。政友會中間々所謂暴桀の子弟に類する者を發見するは、星氏に責任がないとは言はれぬ。伊藤公も西園寺公も松田男も原氏も隨分彼等には惱まされたものてある。加藤子が交際的政黨を改革せんと欲して、所謂飯食ひの懇談會を必要としないと云ふなら、私は彼の態

度を諒とする。所が彼は『人が馬鹿に見えて仕方がない』と言ふさうてある。若し彼がその馬鹿に面會して馬鹿話を聞くのが苦痛だから訪問者を追つ拂ふのだとすれば感心出來ない。勿論他の愚説を聞いたからとて何等の利益なく、時間の損をした上にうるさい目に會はさるゝばかりであるが、人間としては誠意に出てたる説は假令愚説であつても聞いてやる同情心を持ちたいものだ。そして其れがまた人格を豐富ならしめ力强からしむる修養ともなるのてある。

彼が政黨は交際てないと言ふその識見は高い。併しながら其れがために黨員と交際しないと云ふなら、時弊を矯正するための一時の刺戟劑として之を諒とするけれども、眞實それを正しいと思つて居るなら誤りて、若し交際する興味を持たぬと云ふなら、その人格の單調なるに驚かざるを得ない。

言ふまてもなく黨首の業は國民を進歩發展の方面に指導することである。指導とは隨伴することてもなく命令することてもない。隨伴する者は煽動政治家

十九

て、命令する者は官僚政治家だ。政黨の首領は自己の人格内に國民少くとも黨員を包容消化して、彼等と同心一體とならなければならぬ。斯うして彼等を自分の思ふまゝに動かすのが指導と云ふものである。よく指導する者は被指導者に少しも壓迫の感を起させない。窮屈の思をさせない。例へば政黨の黨議は黨員各自の自由意志で決定するのてあるが、彼等のその意志は黨首が豫て彼等に吹き込んだものてある。即ち黨首と黨員との關係は名騎手と馬との如く、鞍上人なく鞍下に馬なしと云ふ狀態にあらねばならぬ。政黨とても所詮は人格と人格との結合團體てある。英國人が英雄崇拜の念に富んで居る結果、その憲政が圓滿に運用され發達したと云ふのは是がためだ。斯うした意味での交際ならば、努めてやるのが本當だらうと思ふ。

原氏は何事に對しても漸進的である。漸進的と言ふよりも生長的と言つた方が適切であらう。是れ現實主義なる彼として當然の歸結だ。それで人を包容するにも一人から二人、二人から三人と漸次に而かも緊密に包容し、一旦包容すれば斷じて之を捨てない。彼が松田男と共に西園寺侯の下に居た頃までは、その緊握した人間は黨内の一小部分に過ぎなかつた。西園寺侯の後繼として總裁に推されはしたものゝ、その當時は包容力を疑はれ、黨員中にはも暫く名義だけでも西園寺侯に留任して頂きたいと望んで居た者が尠くなかつた。

所が愈々總裁になると、黨員の悉くを包容消化しなければ止まぬと云ふ覺悟で、その努力は實に驚くべきものであつた。斯やうにして彼は西園寺侯から讓り受けた政友會を殆んど原流に改築し了した。

彼は朝は八時九時から夜は時としては二時までも、殆んど絶間なく訪客に接し、寢る時間は三四時間しかあるまいと思はれる程であるが、それで少しも疲

れた樣子を見せない。これは彼の内部に人を包容する情と之を消化する力とが豐富であるからである。時には隨分嫌な思をしながら努めて人に面會することもあるであらうが、彼は『折角訪ねて來た者を追ひ歸すのは氣の毒』『折角熱心に意見を述べるのだから、聞くだけ聞いてやらねば……』と云ふ温情を持つて居る。例の穗田の神樣飯野吉三郎の如き、彼に内閣組織の大命が降つた當時など、度々押しかけて行つたもので、彼の周圍の者は世評を憚つて、面會しないやう彼に注意した所が、彼は『折角祝ひに來るものを、飯野だからとて、お前の祝ひは受けぬと言つて追ひ歸すわけには行かぬぢやないか』と、世間の思惑などは眼中になかつた。彼は斯やうな心持で訪問客に會ふのだから、側で思ふほど苦勞はない、從つて身體も疲れないのである。

彼は道理に於ては一歩も人に讓るまいとし、激しき議論を戰はすので、一般から狹量であるかの如く見られて居たが、その議論は單に人に勝たうと云ふ欲

求から起るのではなく、人を包容し消化するための說教である。故に彼は他から見るとあんな人間と眞面目に議論しなくとも、ウン〳〵と聞いて居れば樂て可からうと思はるゝ場合でも、充分に說伏しなければ止まぬと云ふ風である

私は曾て學校を出た許りの一青年を伴ふて彼を訪問したことがある。目的は單に彼の顏を見て置くと云ふ位のことであつたので、一二分間で引きさがらうと思つて居たが、一寸した切つかけて彼の說伏が始まり、その青年はとう〳〵彼の崇拜者となつて歸つた。

斯くして彼は人格を完成すべく努力して止まぬ。そして年一年と進境が見へる。殊に總理大臣となつてからの彼は、久しく彼の周圍に居た人でも、意想外として驚いて居る位である。世人は彼が日常茶飯事の如く內閣を組織したのを見て、彼の手腕に感服したが、是れ彼の人格の現はれである。彼は何れの場合に處しても其平常を失はず——私の知れる範圍に於ては——所謂固くなると云

ふことがなく、機に臨み變に應じて事を處分すること、殆んど當意即妙とも評せらるべき域に達して居るが、是れ彼の人格が精密にして豐富の內容を有し、そして其內容が强き意志によりて緊密に統一せられて居る結果である。彼が大きなことを小さく取扱ふのに妙を得て居ると言はるゝのも亦之がためであるが之が更に圓熟すれば宰相の椅子に坐しても爐邊に團欒するが如く、爐邊に團欒しても宰相の椅子に坐するの心を失はないと云ふ融通無碍の妙境に達するのである。修養の積んだ人には迷ひ煩悶はない。孔子の所謂七十にして心の行く所に從つて矩を踰へずと云ふのは此事で、斯やうになれば公人生活と私人生活は二にして一、一にして二。即ち煩惱即菩提である。

二十

所が原氏は私情に厚い代りに、それがために公事を紊る弊はないかと疑つて

居る者もある。例へば古賀廉造氏の如き、裁判の結果が如何やうにならうとも、官吏として不都合な行爲をしたと云ふことは辯護の餘地はないのであるが、原氏としては決して國家に害を與へても構はぬと思つて彼を官吏に採用したわけではなく、人情をも盡し國民にも利益であると信じてやつたことであるに違ひない。唯だ千慮の一失で、彼は古賀氏を見損つて居たのである。此過失が政治上如何なる責任に値するかは茲に論ずる問題ではないが、道德上の批評としては、過を見て茲に仁を知るのである。孔子の弟子某が孔子に向つて『私の村には父が隣家の羊を盗んだと云ふので、その子が之を官に訴へた者があります。何んと正直な者ではありませんか』と云つたら、孔子は『我黨の直き者は之に異れり、父は子のためにかくし、子は父のためにかくす、直きことその内にあり』と答へた。法律にも涙あり、彼が古賀氏を採用した過失の如きは、之を詰じる者こそ却つてその人格の劣等なるを示すものではなからうか。

彼は又黨派心に強いと云ふ非難を更けることもある。例の鐵道、港灣、學校などを黨勢擴張に利用すると言ふ攻擊の如きは、多くは攻擊せんがための攻擊であつて——間には地方黨員が心得違ひの運動をするかも知れんが——私は多くの識者と共に彼等に與みすることは出來ぬ。政策が多數國の贊成を得れば自然黨勢も擴張するわけであつて、何等不思議はないが、彼が黨派心に強い——黨派心と言ふのに語弊があるすれば、愛黨心に強いことは私も承認する。そして彼は『黨派に居りなから黨派心——或は愛黨心——が強くなくて何うする』と、例の唇を尖らして言ふてあらう。

彼は鄕里に對して非常の愛着心を有し、政界を退引すれば鄕里に住み、鄕里の墓に眠りたいと言つて居る。彼は曾て之を私に語つて『愛鄕心は愛國心の基礎だ』と言つた。彼は又愛黨心は愛國心の基礎だと言ふてあらう。如何にも、黨派の理想は國家の理想であらねばならぬ。黨派の利害は國家の利害と一致し

なければならぬ。故に愛黨心と愛國心とは決して矛盾するものではない。自信ある政治家は大に自黨の勢力を擴張して、自黨の手に政權を握るのが軈がて國家國民の福利を增進する所以だと思つて居るべき筈。

加藤子は鄉里に對して殆んど無關心で、又黨派心に強いと云ふ評も受けない。然らば原氏の黨派心を非難した者は、加藤子は一地方や一黨派などを眼中に置かず、モット大なる國家を愛するものだと言ひ得るか。彼を非難する者は、鄉里さへも愛し得ず、自己の黨派さへも愛し得ない程、情操の貧弱なる者が、何うして國家の大を愛し得やうぞと言ふであらう。併し是も亦原氏の黨派心を非難すると同じく酷評忘斷であると私は思ふ。

私の見る所によれば、黨派に對する原氏と加藤子との態度の差異は、前者が實際的、創作的の傾向を有するに反し、後者が抽象的、批評的の傾向を有することから起るであらうと思ふ。即ち原氏は現實の政黨を指導し、その組織をます

ます大にし堅固にして、以て國家の用をなさうと云ふ創作的の態度であつて、加藤子は國家に有用なる政黨とは如何なるものであるかと云ふ一個の原則を有し、その原則によつて政黨を批評的に見る態度である。

唯だ加藤子に物足らず感ずる點は、彼は政黨を分析的に觀察論究する科學者の態度であつて、組織し統一し創作する理想家の情熱を缺ぐことである。彼が强き理想家であるならば、乾坤一擲、先づ自ら憲政會を解散し、その理想の政黨を創作すべく努力しなければならぬ筈であるが、彼が政黨に關する知識は、單に知つて居るだけで、まだ充分に消化し理想化しないので、實行する力となつて現はれぬのである。而かも彼にはそれが容易に成功しないと云ふことを打算する聰明がある。

廿一

原、加藤、犬養三氏を哲學史に當て箝めて觀察すれば、頗る興味がある。

第十七八世紀に於ける歐洲思想の一般的傾向は、之を主智主義とでも稱すべく（學者は形而上學的とか唯理思想とか啓蒙思潮とか言つて居る）、宇宙の事物は悉く之を理論で解決すべきものとした。道德でも宗教でも政治でも、悉く知識によつて決定されるものと考へた。當時の哲學者スピノザは天地人生は數學的に解決せらるべきものとなし、宇宙の唯一本體と云ふ概念を立て、之を前提として一切を演繹しやうと試み、そして其宇宙の唯一本體と云ふ概念は、幾何學の定理と同じく自明な知識と認めたものである。又ライブニッツはモナード（單子）と云ふ原理で一切を説明した。

斯やうに演繹主義、形式主義、法則主義、官僚主義の乾燥無味な生活は、清新の血に燃ゆる青年の永く堪へ得るものではない。そこで第十九世に入るや、彼等青年によつてロマンチシズムが高調された。ルッソーがその先驅で、獨逸の

ゲーテ、英國のカーライル、佛國のユーゴーなど云ふ文藝家を中心として發展したのである。彼等は主智主義を以て死せる空論となし、眞正面に生ける人間その者を見た。そして人間の情的生活こそ眞實のものであつて、これより尊く美しいものはないと考へた。彼等は主智主義が冷靜氷の如くなるに反して、情熱に燃へ、想像を恣にした。

そしてロマンチシズムと相並んで、理想主義が起つた。之も亦主智主義の形式的、客觀的なるに慊らずして起つたもので、無論ロマンチシズムと同じ流れであるが、主として人格の尊嚴を高調し、道德的傾向を取つた所が異なる點で、又主智主義の演繹論に囚はれて居る。カントがその源流で、彼は人間を肉と靈との二元的に觀じ、肉を殺しても靈に生きよと敎へた。即ち精神生活を高調し擴張して其處に安心を求めやうとしたのである。この理想主義はヘーゲルに至つて絶頂に達し、そのヘーゲルの内に次に來る現實主義の萠芽を示した。

そこで第十九世紀の中頃から、又々思潮が變つた。主智主義は空論であつて、その演繹した結論が如何にあらうとも事實は依然として元の事實である。ライプニッツがモナードで宇宙を説明しやうが、スピノザが宇宙の唯一本體で説明しやうが、どちらにしても人間の實生活に直接の關係はない。また理想主義は空想であつて、主觀的滿足は得られるにしても、現實の社會生活を如何に解決し得るか、實に頼りない態度である。斯う云ふ不安や疑ひが、社會生活の複雜となるにつれて一般に起つて來た。そこでコントの實證主義、現實主義が提唱され、最も確實に最も現實に經驗された事實のみが人間に價値あるものであると云ふ思想となつた。

更にスチユアート・ミルの歸納的論理學が現ばれ、根本の一原理から個々の事實を演繹する主智主義や理想主義を排け、十九世紀は經驗的であらねばならぬ、歸納的であらねばならぬ、即ち個々の事實に就て經驗し、之を綜合して最

高の原理を歸納しなければならぬと云ふことを高調した。斯くてこの經驗主義、現實主義の思潮は澎湃として歐洲全土に漲つたのである。

斯くして今日の偉大なる科學を得たのであるが、この思潮が極度に高められた時に、極端なる物質主義、極端なる個人主義に墮して行つた。そこで最近に至り新理想主義が起り、ベグルソンと云ふ人などが、感情、想像、直觀の如き精神作用に重きを置き、自己の周圍を自己化して、絶えず創造し組織して進むと云ふ所に人間の尊嚴を認め、以て物質萬能思想に覺醒を與へやうとした。

加藤子は主智主義に當て箝まり、犬養氏はロマンチシズム或は理想主義に當て箝まり、原氏は現實主義（經驗主義）と理想主義との調和、現實主義の基礎の上に築かれやうとする最近代の新理想主義に當て箝つて居ると見られ得る。言ふまでもなく彼等三人共に、自分は主智主義だ、自分はロマンチシズムだ、自分は新理想主義だと、その派をきめてやつて居るのではない。唯だ彼等が行

ふ所を批評家として觀察すれば、大體に於て右に述べたやうな傾向を取つて居るやうに思はれるのである。

廿二

犬養氏が強き衝動性の持主であることは一番初めに述べた。衝動とは説明するまでもなく、生得又は環境によつて與へられ、思慮を用ひない活動である。この衝動は最も根本的のもので、人格の基礎をなすものとも見られ得る。近頃流行のラッセルも所有の衝動と創造の衝動とを擧げ、人間は成るべく所有の衝動を壓へて、創造の衝動を盛んならしめなければならぬと説いて居る。ロマンチシズムが主智主義を排したのは、人間の生活は智性生活ばかりではない。衝動的生活もあれば情操的生活もある。人間の眞實の生活は寧ろ衝動的、情操的の生活であると考へたからである。これは確かに主智主義よりも進んだ思想であるに違ひないが、これ亦一方に偏した考へで、彼等ロマン派（ロマンチシスト）は隨分放縱不羈に流れた。

犬養氏は強烈な衝動性を有すると共に、一方に眞理を追及し、藝術に憧憬する高級の情操に富み、且つ想像力に豐かで、頗る情熱的である。彼はロマン派たるべく充分の素質を有して居るのだ。彼は漢學に深い興味を持つて居るが、元來支那にはロマン派が多かつた。三國誌や史記や彼が愛好する書籍であらう。彼が牛込馬場下の舊邸に天を衝くやうな樅の大樹があるが、これは高田馬場邊にあつたのを彼の好みで大金をかけて移したもの、それに野原のやうに廣い芝生、狸でも出さうな森、邸宅の好みからしてロマン的だ。彼が權略に富み術策に長じ、努めて人の意表に出でやうとし、好みて警局を吐くなど、これもロマン的だ。彼が外交——殊に支那經略に興味を有し、國策など云ふ大きな事ばかり考へる如きも、理想主義から出たと言ふよりも寧ろロマン的氣分（一口に言へ

ば芝居氣)と見るのが近いだらう。

また彼は理想主義が最高原理によつて一切を支配しやうとするやうに(カントは道德的意志を以て一切を支配する根本法則とした)、嚴肅に一個の原理を守り、之に合せざる凡てのものを排斥しやうとする。斯やうに原理から演繹する態度は加藤氏と、犬養氏と似て居るが、加藤氏がその原理を知識として取扱ふに反し、犬養氏にありてはそれは力であり、價値である。即ち理想化である。例へば加藤氏は立憲政治の本義をよく知つて居る。知つては居るけれども、それが實現しなくても冷眼に看過し得ると云ふ風であるが、犬養氏は實現しなければ苦痛を感じ、實現すれば滿足悅樂を感ずるのである。此處が主智派と理想派の違ふ所だ。而かも犬養氏が往々にして理窟のために理窟をこねると云ふ風があるのは、主智主義と理想主義とその演繹的なる態度に於て似た點があるからである。

犬養氏の態度はカントの嚴肅主義に似て、主義を守り節を持すること頗る嚴重に、敵味方の區別が甚だ峻烈である。彼が過去の政治的生涯を通じて——時には妥協があつたにせよ、又最近頗るその態度が變つたにせよ——兎も角藩閥打破、憲政の確立と云ふ目的のために、一貫して惡戰苦鬪したことは、何人も之を否定するものはあるまいと思ふ。唯だ彼が一般理想主義者と共に、演繹的態度から離れ得なかつたのに私の慊たらす思ふ所である。即ち彼は初めから憲政と云ふものは斯々のものであらねばならぬと云ふ原理を振りかざして政界を支配しやうとし、異端者(彼に取りて)を排斥し又排斥して、とう〳〵彼の庭園の樅の大樹のやうに、唯だ一人スックと立つた。

彼はその政治上の異端者を排斥する如く、自己の衝動をも殺すべく努める。然れども彼の衝動は殺さるべく餘りに頑强である。斯くて彼の內的生活は鮮血淋漓々たる戰鬪の連續である。彼は常に悶へ藻掻き、イラ〳〵した生活を續け

て居るやうに思はれる。

併し斯やうな道德的戰鬪は尊むべきことである。然れども彼が如く自己の原理の尺度によつて他を排斥するのは、まだ修養が足りないのだ。プラトーンの對話篇に下の如き問答がある。パルメニデースがソークラテースに向つて觀念(理想)とは何かと問ふ。ソークラテースは眞善美又は人火水などを擧げ、併し形の整はないものは觀念ではないと答へる。そこでパルメニデースは、若し充分に哲學的思考をなすならば、形の整はないものは觀念に遠いとは言へ矢張り觀念たり得る。從て一見偶然なるもの、不合理なるが如く見ゆるものでも、よく思考すれば合理的であると敎へた。犬養氏もパルメニデースの弟子になつて修業する必要がある。

且つ彼には强烈な敵對の衝動があつて、他に勝たうとして或は憤り或は憎むことが激しい。藩閥打破の如きも、彼が理想の發現であると同時に、敵對の衝

動も大に手傳つて居る。彼の藩閥打破、憲政確立運動は、ロマン的(感情的空想)半分、理想的半分と見るのが、彼を評し得たものだらうと思ふ。

廿三

理想主義の缺點は靈(觀念、理想)と肉(人慾、物質)と二元を立て、靈は肉を征服しなければならぬと考へたことである。之と同じく、犬養氏が憲政の原理を高調して、悉く他を否定する態度も誤まつて居る。彼は憲政と云ふものを、カントの至上命法のやうに絶對的、先天的のものと思つて居る——イヤ彼とても然う誤解するものでないと云ふことは勿論であるが、彼は實際に於て然う云ふものゝやうに取り扱つたのである。そこが即ち彼が憲政を知識として取り扱つたのではなくて、理想化した所以である。主智主義ではなくして理想主義たる所以である。私は斯やうに彼が憲政を絶對的、先天的のものゝやうに取

り扱つたことが誤りてあると云ふのである。政治の目的は畢竟するに治國平天下であつて時の宜しきに適するやう政策を立て官制を定めなければならぬ。固定したものではなくして、變化し進歩して止まぬものである。憲政と名付くる所のものはその一過程に過ぎない。これが原氏の態度であり現實主義の立場である。大學に『事に本末あり物に終始あり、先後する所を知れば道に近し』とあるのは、おぼろげながら此意味を言つたものだ。

犬養氏は『惡を憎むこと天下自分より甚だしい者はない』と言ふさうであるが、天地間に絶對的、先天的に善惡の區別がありやう筈はないのである。大學に所謂、先後する所を知らず、即ち先後を誤まるから或は惡となり或は善となるのだ。例へば人を殺すと云ふ行爲にしても、同胞を殺すのは惡事であるが、戰爭に臨んで敵を殺すのは善事である。人慾的衝動でも初めから惡いものはなく、又この事實を消して仕舞うことは出來ない。唯だ事の宜しきに從つて之を

盛頓し調和せしむれば可いのである。

理想とか主義とか言へば甚だ尊嚴なものゝやうに感ぜらるゝが、若し人間から衝動、情緒、歴史、社會など云ふものを取り除いたならば、後には何が殘るか、矢張り理想と云ひ主義と云ふも、衝動や情緒に依つて着色され、又歴史的のものであり社會的のものである。斯う考ふれば理想も主義も決して絶對的のものでもなく、釘づけられた固定的のものでもなく、唯だ現實を調和し組織したものたるに外ならぬ。即ち現實を離れては理想もなければ主義もない、これが原氏の態度であり現實主義の立場である。

現實主義は確かに思想上の一大進歩に相違なかつた。イヤこの主義こそはルネサンス當時からの歐洲思想の本流であつて、歐洲文明の基調であると學者は言つて居る。所がこの本流が眞すぐには流れないで、或は主智主義に停滯したり、或はロマンチシズムや理想主義の岩にせかれたりして、漸く本流に歸つた

かと思ふと、又々側路にそれて、該主義の代表者と目されたフォイエルバッハは『人間は食ふ動物である』とまで極論するやうな次第となり、極端な物質主義や極端な個人主義に墮した。そこで新理想主義が擡頭して來たわけであるが、之が大成して現實主義は再び本流に歸るのである。新理想主義と云ふのは決して舊理想主義そのものに歸るのではない。現實主義を基礎としたる新らしい理想主義であるが、私は特に之を新理想主義と言はなくとも、矢張り現實主義で澤山だと思ふ。門ち新理想主義は現實主義の本流で、現實主義の大成したものが新理想主義とも見られ得る。原氏は前にも述べた如く、物質主義・個人主義の支流に迷はず、現實主義の本流、即ち現實主義に立脚した理想派たる態度を持して居るのである。これに就ては尙ほ少々述べなければならぬ。

廿四

現實主義の先驅たるコントの實證哲學は無理想無目的の白紙主義であつた。それは個々の事實の上に於ける關係や、活動の反復せらるゝ列次などを確定するに止まり、斯々あらねばならぬと云ふ理想や、到達すべき最後の目的を定めなかつた。コントは佛國人であるから原氏は無論彼を研究したであらうと思ふ。

原氏は斯やうな現實主義の上に立脚して居るが、唯だこれだけではない。舊想理主義に入つた橋と見るべき大哲ヘーゲルは『凡て現實に存在するものは理性的である』と言つたが、これが即ち原氏の思想の芽であつて、彼は現實即理想と觀じて居る。煩惱即菩提、彼の白紙の裏には理想が書かれて居るのである。私が本論の初めに原氏の現實主義は理想を通じたものであると言つた意味はこれだ。

如何にも、吾々の家庭生活に就て考へて見るに、吾々は初めから何か最高原理を定めてそれを中心に家庭を作つたのではない。又父母に孝に、兄弟に友に、

夫婦相和しと云ふ教へに規定されて家庭を維持して居るのでもない。親となり子となり、夫となり妻となるべき現實的理由があつて結び付いたものである。父母に孝に云々の教義は、この親子兄弟を組織し調和すると云ふ努力によつて作り出されたものだ。そしてその組織體は更に更に努力して、更に更に生活を充實して行くのである。

之と同樣に、政黨も各人の利害、感情、政綱と云ふやうな動機や條件で組織せられ、その組織體の努力によつて益々政綱の內容を深め、高め、廣めつゝ、新らしい政策を案出する。これ政黨の理想化である。故に政黨は一時的では宜しくない。例へば夫婦間に意見感情の衝突があつた時に直ぐに離別するのは間違つて居る。圓滿なる夫婦生活を創造すべく兩人努力しなければならぬ。これが夫婦の理想化である。政黨亦然りだ。

尾崎行雄氏は政黨は或政策を中心として離合集散すべきものであつて、黨員

名簿などは必要ないと主張したことがある。これは或與へられたものを實現すると云ふ舊理想派の考へ方だ。吾々は或與へられたものを實現すべく努力するのではなく、努力によつて或者を創造しなければならぬのである。事實に於て政黨と云ふものは然樣に單純には參らぬのみならず、また然樣な單純なものでは宜しくないのである。政黨には猫も杓子も這入つて宜しい。一己の利害のために這入る者も之を包容して差支ない。唯だ彼等は組織化されねばならぬ。同化されねばならぬ。假令黨議に反對でも、その黨議は我を含む組織體なる政黨の努力によつて作られたものであるとして、之を實行すべく努むる者であれば立派な政黨員である。決して良心を賣つて居るものではない。

人間も同樣で、人を毛嫌ひする必要はないのである。足利尊氏でも石川五右衞門でも之を包容して何等差支はない。要は唯だ彼等を自己の組織體に取り入れなければならぬ。而かも彼等自身が改心しなくとも宜しい。彼等を善化し美

化するのは取り入れた者の力である。彼等は組織を離れると惡であるが、組織に入れば善だ。尊氏でも五右衛門でも用ふる者によつて善とも惡ともなるのである。孟嘗君は食客三千人、鷄鳴狗盜の輩を集めたと云ふが、彼等が悉く孟嘗君の人格内に這入つて組織化された時に、孟嘗君の人格はそれだけ擴大したのである。

斯やうに組織―調和することは即ち創造であり、同時に所有である。政友會は原氏の創造であり所有である。同時に元田肇氏も大岡育造氏も岡崎邦輔氏も其他二百九十の黨員全部も、各自己の創造であり所有であると思へば思ひ得る。人間は斯やうに創造し又創造して宇宙の内容を豐富ならしめるのである。

ラッセルは創造の衝動を高調して、所有の衝動を壓へるが、ラッセルの所謂所有の衝動と云ふのは占領の衝動を指すのであらう。私の所謂所有意識は占領とは違ふ、共有され得るものである。例へば政友會は黨員各自の創造とし黨員

各自の所有として毫も爭ふべき理由はないではないか。我々は國家を全國民と共に所有しなければならぬ。國家を所有しやうと思へば、之を自己の人格に同化せしめねばならぬ。同化すると云ふことは創造である。通俗の語で言へば改造と云つてもよい。而して創造は努力である。憲政會をして加藤子の創造たらしむるには更に大に彼の努力を要する。尾崎氏の如きは單に憲政會の名簿に記入されて居ると云ふだけで、彼自身憲政會を自己の創造とは言ひ得まい。

斯やうに創造し所有することの豐富なれば豐富なるほど、人間の生活は益々充實し、滿足と悅樂とが來るのである。故に一方から見れば人間は自己滿足を目標として進むものであるとも言はれ得る。原氏が常にニコ〳〵した態度を保持するのは、その生活が充實して居るからで、犬養氏がイラ〳〵して居るのはその生活が充實して居ないからである。所が此處に一つ似せ者がある。それは野狐禪と云ふもので、環境を自己化して組織調和する創造力なく、さわらぬ神

に祟なしとして世間を冷眼視し、以て我は悟つて居ると云ふ顔をする者がその野狐禪だ。

而して自己滿足と言へば惡い事をしても自己が滿足すればそれて宜しいかと言ふ者があるか知れぬ（本文を讀む者にはそんなことはあるまいが）。滿足は普偏的であり永續的であらねばならぬ。即ち我主觀一つの滿足でなく多くの人の滿足でなければならず、一時的の滿足でなく永續的の滿足であらねばならぬ。斯やうな滿足を得る行爲は決して惡ではないのである。若し行爲が惡ならば假令滿足してもそれは刹那に破れるのだ。ヘーゲルが『凡て現實に存在する所のものは理性的である』と言つた理由もこれて判かるだらうと思ふ。所が舊理想主義は絶對的最高の原理によつて一切を支配しやうとするから、完成と云ふことを豫想するが、組織調和には限りがない。創造には限りがない。大組織大調和の上に更に大組織大調和を豫想し得られる。大創造の上に更に大創造を豫想し

得られるのてある。故に人格には完成なく、人間には絶對的の滿足なく、唯だ無限の精進努力あるばかりである。前にも述べた如く、立憲政治は政治の一過程に過ぎずして、更に何う云ふ政治の形式が創造されるかも知れぬ。その時に犬養氏は何うするか、俗人から變節改論と言はれずばなるまい。白紙主義こそは人生の眞理だ。その白紙主義の裏には理想主義がある。

人格に完成なく、人間に絶對の滿足がないとすれば、人間は實に心細い次第て、頼りなき浮世、苦しみの娑婆だと非觀する者があるであらう。全くその通りてある。所が此處に一つ人間を救ふて絶對滿足を得せしむるものがある。それは即ち宗教だ。人間が組織と調和に行詰つて、につちもさつちもならなくなつた時に、初めて神佛を見得る。この神佛を信じて一念發起すれば、忽然として無明の闇を出て、光明世界に入り、絶對の滿足悦樂を得るのてある。私が前に原氏が人事を盡して天命を待ち、一二分を天に任かせて斷行すると述べたの

は此處てある。彼はこの宗教的悟りを有して居る。

廿五

犬養氏の敵對の衝動は環境に養はれて益々强烈となつた。そのロマン的及び理想派的傾向は、父祖の血に混じて彼に傳へられた。

彼が祖父は備中庭瀬の板倉氏に仕へ、儒を以て一藩の尊敬を集めたものだと云ふが、父源左衞門氏の代となつてから、浪人して鄉士となり、賀陽郡川入村に移り住んだ。彼は安政二年を以て此家に生れたのてある。(今年六十七歲。原氏より一つ上)。彼の父は水莊と號する儒者だつたが、彼の叔父も亦田舍には珍らしい漢學者て、號を松窓と言つた。共に悁介不羈の頑固爺だつと云ふ。

彼は藩の儒者森田月瀨と云ふ人に就て學んだが、後には專ら叔父松窓氏の敎を受けた。彼の父及び叔父が共に鄉士の儒者だつたと云ふ一事て、彼の家庭生

活は大概想像される。少くとも反抗的氣分が家に漲つて居たことは間違ひなからう。松窓氏などは藩士などが何んだと言つて、彼が眼に文字なく理義に晦いことを罵倒して居たことが目に見へるやうてある。

殊に毅氏は年十五にして既に諸子百家の書を讀破したと云ふ位で、才を恃み氣を負ひ、眼中人なき惡戲小僧だつたと云ふ。そして藩士の子弟が徒らに門閥を誇り、徒衣徒食、飄々として社會の上流に翼を張るのを見て、持つて生れた敵對の衝動はいやが上に强烈となり、その小さき胸は意地を以て滿たされた。彼が六七才の頃、或日惡戲が度を過ぎて畑の作物を荒らし、百姓に叱責されたが、それが口惜しいとあつて、腰にさした小刀を引き拔いで作物を切り廻はり、傍若無人の亂暴を恣にして引き上げたと云ふ話が某氏著の彼の傳記に載つて居るが、萬事がこれ位に衝動的だつたらしい。そして反抗的だつたらしい。

彼は十七八歲の頃、縣廳の筆生に雇はれ、二十歲位まて勤めた。當時岡山縣

は小田縣と稱し、矢野文雄氏の父矢野光儀と云ふ人が其處の權令だつたが、彼は此人に深く愛せられ、その督勵によつて、月給を貯へた金を旅費として東京に上つた、明治八九年頃のことであらう。

彼は上京して湯島の共慣義塾に入り、英語の教授を受ける代りとして、塾生に漢學を敎へた。共慣義塾は福地源一郎氏が創立したものであるが、彼が入塾した頃は原氏の舊主家たる南部家が管理して居たさうである。

それから彼は塾長神田精二氏の紹介で栗本鋤雲翁の食客となり、其處から慶應義塾に通學したが、後には塾の寄宿舍に入り、報知新聞に寄書して生活費を補つた。

鋤雲翁は幕府の遺臣で、一代清節の士であつた。生來敵對の衝動に強く、意地で固めたやうな彼は、鄕里に在つては門閥家に對して反抗心を燃やし、上京しては南部家——維新の時薩長に抗し、矢盡き刀折れて遂に止みたるその南部家の

管理する塾に學び、今また薩長政府の祿を食むを屑しとせず、頑然として前朝の遺臣を以て自ら居る鋤雲翁に師事し、更に勝海舟を腰拔けと罵倒した三田の大先生福澤翁の門に入るに及んで、彼は鐵の磁氣に吸はるゝ如く、藩閥政府反對の旗幟の下に引き付けられて行つた。

彼の號『木堂』と云ふのは、鋤雲翁が撰んで彼に與へたものださうであるが、老子の『木强ければ共す』と云ふ句から取つたのだと云ふ。彼は實に各詮自稱、木强の蠻カラで、一にも西洋二にも西洋の當時の塾生とは氣が合はず、尾崎行雄氏などとは互に嫌ひ嫌はれた間であつたさうである。

彼は明治十年西南の亂が起つた時に休學して從軍記者となつたが、軍人から大尉位に用ふるから軍人になれと勸められ、一寸心を動かしたこともあると云ふ。ロマン的の側面を有する彼のことで、實際軍人にならうかと思つたかも知れぬ。從軍記者になつたのもロマン的氣分の發露だ、彼は從軍中に赤痢に罹つ

たので、ズボンの尻に穴を切り開き、以て上廁に便ならしめたと云ふが、彼の一徹の氣象を髣髴せしめて居る。

西南戰爭が平定して後、彼は再び塾に歸つたが、何時とはなく退學して、明治十二年今の東洋經濟新報の前身たる東海經濟新報を創刊してその主筆となつた。斯くて明治十四年大隈侯（時の參議）と福澤翁との握手となり、彼は同窓出身たる矢野文雄、尾崎行雄氏等と共に官界に入り、統計院權少書記官に任ぜられたが、僅々三四月で大隈侯と共に藩閥のために放逐された。さなきだに反抗心强き彼が當時の憤怒たるや、怒髮冠を衝くと云ふ有樣であつたらうと察する。恰度此年加藤子は大學を出で原氏は報知新聞に入つたのである。

彼が藩閥に對する怨恨は、斯くして愈々その根を深くし、藩閥打破の四字の題目は、彼の理想となり信仰となつた。そして翌十五年改進黨が組織さるゝに及び、彼は眞先きに馳せ參じてその中堅となり、爾來四十年、藩閥に抗して戰

つたのである。

廿六

彼は或はロマンチシズムの如く――傳奇的空想的狂熱者の如く――或は殉教者の如く、四十年の政治的生涯を經過した。そしてその間に彼は或は神と呼ばれ或は惡魔と言はれたりなどした。神と呼ぶ者は彼のロマン的方面に共鳴する青年で、惡魔と言ふ者は彼の異端者である。共に彼の全體を見て居ないのだ。

彼を難ずる者は彼が餘りに感情に走りて要なき爭ひをなし、或は嫉妬陷穽の行爲があると言つて人身攻擊をまで加ふることがある。彼等は尾崎行雄氏が去つたのも彼がためである。島田三郎氏が去つたのも彼がためである。河野廣中氏が去つたのも鳩山和夫氏が去つたのも平岡浩太郎氏が去つたのも悉く彼の陷穽する所であると言ひ、甚だしきは中村彌六氏の脫黨さへも、罪を彼に歸した

者があつた。

如何にも彼は感情家に違ひない。併しながら單に感情だけで同主義者を排斥するやうなことはあらう筈がないと私は信ずる。殊に右に擧げらるゝ人々は悉く斯界の大家である。彼等は一個犬養氏の陷穽によつて排斥し去らるゝほど、斯やうに基礎の薄弱な人達でもなく、一個犬養氏に快からずとして、多年愛護の黨を捨つる人達でもないと思ふ。彼等の脫黨を以て犬養氏の感情の結果とするのは、彼等を侮辱すると云ふものだ。彼が彼等と合はなかつたのは、畢竟するに彼等は彼の異敎徒であつたからだと私は信ずる。

彼は曾て矢野文雄氏の屯田持久說に反對して後藤象二郎伯の大同團結に加はり、また第一議會開會前九州改進黨が民黨各派の大合同を斡旋した時にも、彼は熱心な賛成者であつたが、尾崎氏や島田氏等の反對によつて合同が出來なかつたのを、今日も尙ほ遺憾として居る。尾崎氏や島田氏は自由黨を毛嫌ひの氣

味だつたが、犬養氏は主義主張さへ同じければ之と合同するに躊躇しなかつたのだ。

彼が桂公と合同することをきかなかつたのは、この合同たるや、桂公は國民黨を利用してその野心を遂げんとし、國民黨の合同派は桂公を利用して政權に近かんとする慾と慾との野合だつたからだ。少くとも彼は斯う解したのである。

カーライルが『全世界の屈從主義に一大痛擊を與へたる者』と評したクロンウエルは、その熱烈なる信仰のために、衆愚を高壓すること最も嚴に、反對者に對して寸毫も假借する所なく、罪惡を懲すこと峻酷を極めた結果、確信なく操守なき彼等衆愚は、彼を指して猛犬よりも狂暴獰惡なる怪物よと叫び、或は怨み或は罵つた。

薩長の諸人は、四民平等を唱へて幕府を倒したけれども、實は自ら征夷大將軍となり若くは大名になりたかつたのかも知れぬ。さればこそ華族制を設けて

自ら大名に擬し、下女下男に己れを殿様と呼ばせて嬉しがり、俊介は博文公となり、狂介は有朋公となり、聞太は馨侯となり、源朝臣、藤原朝臣など丶自稱して得々然たるは笑止千萬だ。その薩長を倒さうと云ふ政黨員の中にも、實は薩長の眞似をしたさの薩長打破者が居なかつたとは保證されぬ。原内閣が出來る前には、原敬は平民だから總理大臣にはなれぬと宣傳する者が政黨員の中にあつた。大隈首相も加藤憲政會總裁(當時同志會總理)も自分で自分の陞爵を奏請した。陞爵ならばまだ貰ひ甲斐あるとして、日獨戰爭の論功行賞で勳章を貰へると云ふので代議士候補に立つた者も尠くなかつた。慾の深い連中は勳四等の上に正六位でも附け加へて貰ひたいと浮身をやつす者もあつた。こんな手合に向つて、主義を守れ解散を恐れるなと注文するは、クロンウエル同樣、猛犬よりも狂暴獰惡であるかも知れぬ。犬養氏を憎む者はクロンウエルを怨んだ者の類と見ることも出來るのであるが、彼にも亦一己の理想を他に强ゆる專制的

廿七

の弊があつたのである。即ち人格が大きくないと云ふ缺點は確かにある。

然らば彼は權勢利祿を土芥のやうに心得て居るかと申せば、强ち然うでもない。彼は曾ては進步黨を率ゐて松方内閣と提携し、また山本權兵衞伯を押し立てゝ政友、進步兩黨聯合内閣を組織したいとも思つた。併しそれは單に權勢利祿が欲しさのためではなく、また原氏の如く徹底的現實主義の考へからでもなく、イヤ現實的にも考へたには考へたであらうが、それには多分のロマン的氣分(芝居氣)が加はつて居たのである。彼が前半世は隨分ロマン的氣分が濃厚で、權謀術數的の奇襲を好んでやつたものであるが、到底政友會に勝つことが出來ないと諦めてから、即ち例の改革非改革騷ぎ時代から、正攻法を取るやうになり、嚴肅主義を高調したのである。

併しながら彼は感情家である。假令議論は合つても、虫が好かなければそれを受け容れないと云ふこともないとは限らぬ。彼も亦頗る洞察力に強いが、原氏の洞察力は智性の緊張裡に現はれ、彼のそれは情性の緊張裡に現はれる傾向を有つて居る。故に原氏は利害の打算に鋭敏で、彼は愛憎好惡の區別がハッキリする。原氏の前に立つた人間は忽ち賢愚を見拔かれるが、彼の前に立つた人間は、先づ好きか嫌ひかに區別される。而して原氏は相手が愚者であるからと言つて、決して排斥疎外はしないけれども、彼は嫌ひな者とは語を交はすのもいやと云ふ風があり、愚者に對しては面前に之を罵倒して憚らないと云ふ態度である。

それに彼は想像力に富んで居るので、原氏の洞察が推理作用の一瞬間に纏まる結果かと思はれるに反し、彼のそれは想像が迅速である結果ではないかと思はれることがある。そしてその想像は悉く當ると云ふのではなく、時には邪推があるのである。且つ彼は敵對心が強いから、心理學上當然の結果として、憤

怒、憎惡、嫉妬、羨望なども強からざるを得ぬ。斯う評すると頗る人身攻擊に當るやうであるが、前にも述べた如く、此等の衝動若しくは感情は決して初めから惡いとは定まつて居らない。唯だその整頓調和の如何によつて善ともなり惡ともなる。昔は文王一度び怒つて天下の民を安んじたのである。

曾て久しく國民黨に席を置いた某氏が犬養氏と尾崎氏とを評して『新米の代議士は、多くは一年目には犬養氏に接近するが、二年目には彼と遠ざかり、三年目には彼を恨む。尾崎氏に接近した者は二年目には彼と離れ、三年目には彼を馬鹿にする』と言つた。勿論酷評ではあるが、彼等の大體傾向を語つて面白い。

犬養氏が大隈内閣に入らなかつたのを、彼の例の感情だと非難する者もあるが、大浦氏の如き思想の人と同じ内閣に席を連ねて、二師團增設を行ふなどは、彼の理性が許す筈はないのである。併しながら大隈内閣の出現は彼の感情に激動を與へたに違ひない。ために漸く纏まりかけた彼の統一は再び破れ、大隈内

閣後、動もすれば感情的偏見の曝露を見ることがある。彼は一旦正攻法を取り、嚴肅主義になつたが、近來又々多少ロマン的氣分にも歸つたやうに見へる。

大隈侯は曾て彼を評して『犬養には一つの病がある』と言つた。その病とは何を指すか知らないけれども、寔に一つの病がある。それは彼の智慧道樂である。人の趣味性には情的のものと智的のものとあつて、彼はその智的趣味に富んてあるのだ。例へば刀劍にせよ書や硯にせよ、彼は之を美として歡喜渦仰するのではなく、之を研究し批評し講釋して悅に入るのである。

彼は智慧者てある。また智慧自慢である。而してその智慧が常に實用的にのみ用ひらるゝかと云ふに、强ち然うでもなく、必要以外又は以上に智慧を働かせ、その智慧を働かせることによりて趣味を感ずることがあるらしい。言はゞ智を弄するのてある。されば彼は戲談も理詰めの戲談を好み、嚥飲にも機鋒を示さなければ止まぬ。例の皮肉、毒舌も亦この弄智趣味から出ることが多い。

これがロマン氣分と呼應する時には一種の深い色彩を示すけれども、これが藝術的に成り損なへば人に惡感を與へる。斯やうな道樂ごとは道德上好ましからざるのみならず、彼自身も損失を招ぐのてあるが、道德や利害を顧慮する暇がない所に趣味の趣味たる所以は存するのだ。

彼が政治上に於ける權謀術數も亦ロマン的氣分と共に弄智趣味から出ることがある。この道樂は彼の境遇が養つたことも尠くない。彼は久しく小數黨を率ゐてた結果、責任の地位に立たなかつたので、徒らに智を弄して悶をやるの傾向を作つた。所謂惡戲であるが、而かもこれは第三黨として必要の場合もあつたのてある。又國民黨には改進黨以來殆んど內訌の絕間なく、領袖互に勢力を爭つて反目嫉視すると云ふ風があつたので、天性情性の緊張したる彼は、多年この渦中にあつて煩悶し、猜疑し、警戒し、劃策しつゝ、自然にその態度は沈痛味を帶び、その策は深刻奇辣となり、彼の居る所、常に凄味が漂ふと云ふ有樣

になつたのであらう。

國民黨成立當時、彼は大石氏と相携へて大阪に下り、某有力者に入黨を勸めたことがあつた。某氏は容易に諾否を語らず『兩君の間には常に確執があつて、內部に紛擾が絶えないと云ふことであるが、然う云ふ有樣では吾輩も去就に迷はざるを得ない』と言つた所が、彼は造作もなく一笑して、然やうなことは新聞記者の揑造に過ぎないと答へたのは可いとして、翌早朝彼は密かに某氏を訪ひ、大石氏と確執の說は强ち根據のないことではない、どうか自分一人を信じて入黨して呉れと賴んだ。某氏は遂に入黨しなかつたが、後日人に語つて『犬養は妙な人間だ』と言つたさうである。これは私が人から聞いた話で、事實の眞僞は知らないけれども、併しながら有りさうな話である。されど決して彼を妙な男と云ふには當らぬ。何となれば彼は國民黨が何うして出來たかを知つて居た。國民黨の組織せられたのは、彼に負けた改革派が、憲政本黨を奪ひ去るべ

く、手傳人を引連れて來た結果だ。河野廣中氏も島田三郎氏も片岡直溫氏も、大石氏の手傳人として加入したのである。憲政本黨が國民黨となつて黨員を增したのは、一見喜ぶべきことのやうであつたけれども、黨員の增したのは犬養氏の勢力の減少となつたわけで、彼は國民黨成立當初に於て、遂に破裂の時が來ると云ふことを豫期したのであつた。そは兎も角、改進黨以來常に斯う云つたやうなことが行はれたのである。明治三十一年憲政黨內閣が出來ると云ふ時に、隨分獵官熱が盛んで、平岡浩太郎氏なども閣員とならないとしても次官か知事にでもなりたい希望で密かに運動を試みたものである。平岡氏の性質を知れる彼は、一夜平岡氏を訪ふて獵官熱の猖獗を極むることを慨歎し、此熱を封じ得る者は僕と君との外に一人もない。何うか盡力して呉れと言つた所が、果然平岡氏はいつもその得意の場合にするやうに、椅子の上に胡坐をかいて『そりや大變ぢや、ヨシ〳〵おいどんが引き受けた』と、獵官熱病者忽ち變じて獵

官熱封じの役に廻はつたと云ふことが、某氏著の犬養傳に載つて居る。これも事實か否か知らないが、有りさうな話である。如何にもこれは機略であつて彼の自慢話の一つであるかも知れないけれども、斯やうな機略を友人に對して用ふると云ふことは餘りに誠意を缺いだ話である。併しこれは彼が人を陷れんとする隱險な魂性から出たのではなく、例のロマン的氣分と弄智趣味から出たものと思ふ。

これで私は三黨首領に就て言はんと欲する所は大概言ひ盡した。抑も人格はその內容が精細なるか粗笨なるか、豐富なるか貧弱なるか、その內容は如何やうに統一されて居るか、その統一は緊密なるか脆弱なるか等によりてその型と値打が定まるものである。讀者試みに私が以上述べた所を繰り返して、靜かに彼等三黨首領の人物を考へたならば、自ら釋然たるものがあるであらう。

大正十年十月六日印刷
大正十年十月十日發行

（三黨首領）
定價金八拾錢

著者 前田蓮山
發行者 東京市神田區鍛冶町五番地 伊藤小四郎
印刷者 東京市芝區櫻川町二十番地 淺野榮作

版權所有

發行所 東京芝區琴平町二番地 文化出版社 電話芝六六七五番
發賣所 東京神田鍛冶町 誠之堂 電話神田九四九番 振替東京四七七二番

株式會社大高印刷所印行

394 281
109 MA26

25. 9. 19

終